

# 主要地方道成田松尾線Ⅷ

—松尾町名城遺跡—

平成10年3月

千 葉 県 土 木 部

財団法人 千葉県文化財センター

# 主要地方道成田松尾線Ⅷ

—松尾町名城遺跡—



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第333集として、主要地方道成田松尾線の建設に伴って実施した山武郡松尾町名城遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この遺跡では、縄文晩期の土器や平安時代の住居跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年3月31日

財団法人 千葉県文化財センター  
理事長 中村好成

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道成田松尾線県単道路改良（幹線道路網整備）事業（松尾地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県山武郡松尾町八田字名城3,385ほかに所在する名城遺跡（遺跡コード12407-014）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の組織、担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任技師 石塚 浩が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県山武土木事務所、松尾町教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第2図 国土地理院発行 1/50,000地形図「東金」(NI-54-19-11)、「成田」(NI-54-19-10)
  - 第3図 千葉県発行 1/2,500都市計画図「成田都市計画41」、「成田都市計画42」
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

## 本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
(1)	調査の経緯と経過	1
(2)	調査の方法	2
2	遺跡の位置と環境	4
II	縄文・弥生時代	8
1	概要	8
2	遺構と出土遺物	8
3	遺構外出土遺物	8
(1)	土器	8
(2)	石器	12
III	古墳時代	15
1	概要	15
2	遺構と出土遺物	15
IV	平安時代	20
1	概要	20
2	遺構と出土遺物	20
V	中世以降	30
1	概要	30
2	遺構と出土遺物	30
VI	まとめ	34
	報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第1図	蕪木5号墳の調査結果(2重周溝)と変更された事業地……………1	第14図	009号竪穴住居跡及び出土遺物……………21
第2図	グリッド設定……………2	第15図	015号竪穴住居跡及び出土遺物(1)……………22
第3図	下層確認グリッド配置図……………3	第16図	015号竪穴住居跡出土遺物(2)……………23
第4図	名城遺跡周辺の地形……………3	第17図	013号竪穴住居跡及び出土遺物(1)……………24
第5図	名城遺跡周辺の遺跡……………5	第18図	013号竪穴住居跡出土遺物(2)……………25
第6図	名城遺跡遺構配置……………7	第19図	020号竪穴住居跡……………26
第7図	022号土坑……………8	第20図	005号掘立柱建物跡及び出土遺物……………27
第8図	第I群・第II群(1)土器……………11	第21図	021号掘立柱建物跡……………28
第9図	第II群(2)・第III群・第IV群土器……………13	第22図	007号土坑及び出土遺物……………29
第10図	出土石器……………14	第23図	008号竪穴住居跡及び出土遺物……………30
第11図	014号竪穴住居跡及び出土遺物……………16	第24図	004号道路遺構……………31
第12図	001号道路遺構及び出土遺物(1)……………17	第25図	012号土坑・023号土坑・011号炉跡 ・010号土坑……………32
第13図	001号道路遺構出土遺物(2)……………18		

## 表目次

第1表	出土石器属性表……………14	第2表	土器観察表……………36
-----	----------------	-----	--------------

## 図版目次

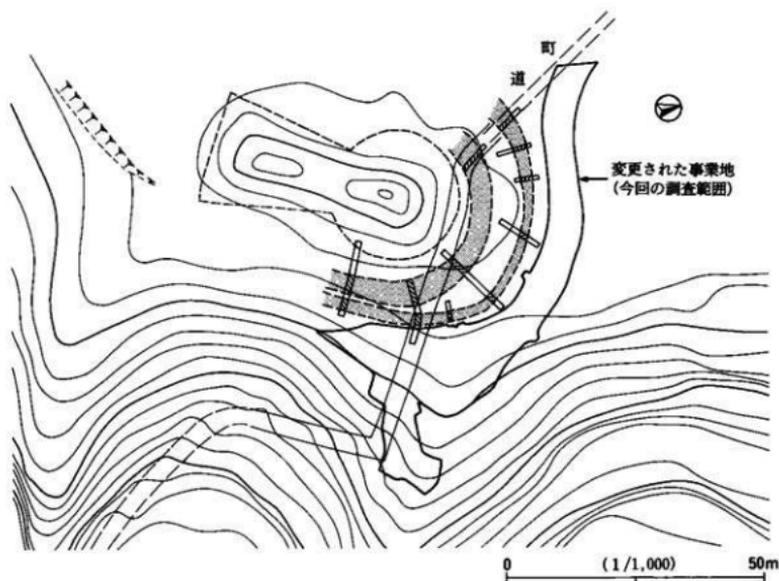
図版1	名城遺跡周辺地形	021号掘立柱建物跡	
図版2	遺跡遠景 調査前近景 調査風景・022号土坑	図版7	008号竪穴状遺構 004号道路遺構 012号土坑・023号土坑 011号炉跡・010号土坑
図版3	014号竪穴住居跡 014号カマド・001号遺物出土状況 001号道路遺構	図版8	縄文時代土器(1) 縄文時代土器(2)・水神平Ⅱ式土器
図版4	009号竪穴住居跡 015号竪穴住居跡 015号カマド・015号遺物出土状況	図版9	遺構出土遺物(1)
図版5	013号竪穴住居跡 013号遺物出土状況	図版10	遺構出土遺物(2)
図版6	005号掘立柱建物跡 005号土層断面・007号土坑	図版11	遺構出土遺物(3) 鉄製品 出土石器

# I はじめに

## 1 調査の概要

### (1) 調査の経緯と経過

財団法人千葉県文化財センターでは、主要地方道成田松尾線路線内に所在する遺跡について、昭和53年から千葉県教育委員会の指導のもとに計画的・継続的に発掘調査を実施してきている。この成田松尾線の関連事業として、千葉県土木部は、山武郡松尾町八田字名城に松尾工業団地への連絡道及び町道との連絡道を計画し、平成6年に『埋蔵文化財の所在と取扱いについて』によって、千葉県教育委員会に照会をした。しかし、計画路線は蕪木5号墳の墳丘に隣接し、周溝にかかる可能性があったため、松尾町が事前に蕪木5号墳の周溝範囲の確認調査を実施することとなった。平成6年10月18日と11月24日、両日に松尾町教育委員会によって確認調査が行われた結果、蕪木5号墳には2重周溝が存在し、計画路線がこれを横断することが確認された(第1図)。そこで、この取り扱いについて千葉県教育委員会文化課と協議を重ねられ、同古墳の保存を優先するものの、事業の中止は困難であるため、周溝を迂回するよう計画を変更することとなった。しかし、新たな計画地についても遺跡の所在が確認されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、千葉県土木部との間に平成8年12月に発掘調査の委託契約が締結された。



第1図 蕪木5号墳の調査結果(2重周溝)と変更された事業地

名城遺跡の調査は、2期に分けて実施された。第1期は平成8年12月2日から平成8年12月13日まで調査対象面積210㎡が実施された。また、第2期は平成9年5月1日から6月13日まで調査対象面積770㎡が実施された。その結果、上層については遺構の広がりが確認された。また、当初の遺跡範囲外に道路遺構が続いていたために、千葉県教育委員会文化課の指導により、調査範囲を一部拡大した。下層については調査区北側に礎1点が検出されたのみで、確認調査をもって終了した。

調査の結果、縄文時代前期・中期・晩期の遺物、弥生中期の遺物、縄文時代の土坑1基、古墳時代の竪穴住居跡1軒、道路遺構1条、平安時代の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、中世の道路遺構1条、竪穴住居遺構1基等の遺構とともに該期の遺物が検出された。この中には、弥生時代中期の水神平Ⅱ式土器のように、県内においても貴重な資料が検出された。平成9年度に整理作業が開始された。整理作業は2か月実施し、平成10年3月をもって報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 西山太郎、東部調査事務所長 石田廣美の指導のもと、下記の職員が担当した。

平成8年度	平成8年12月2日～12月13日		
(発掘調査)		技師	永塚俊司
平成9年度	平成9年5月1日～6月13日		
(発掘調査)		主任技師	石塚 浩
平成8年度	平成9年8月1日～9月30日		
(整理作業 水洗・注記～原稿執筆、刊行)		主任技師	石塚 浩

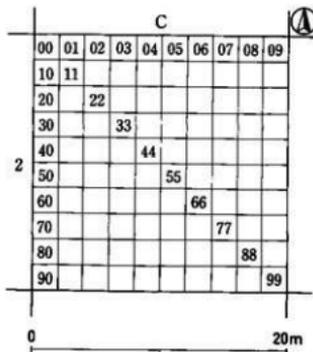
## (2) 調査の方法

**調査区の設定** 調査対象範囲全域を、公共座標に合わせて東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、3、……とし、西から東へA、B、C……として、これを組み合わせ使用した。大グリッド内は2m×2mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00、01、02……として南東隅を99とした。最小グリッドの表記はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、たとえば、2B34のようにした(第2・3図)。

**上層確認調査** 縄文時代以降の上層の調査は、調査区全域が本調査範囲に指定された。ただし、当初遺跡範囲に指定されていなかった台地縁辺部については、遺構が続いたので確認調査を行い、遺構の分布する範囲に限って、調査範囲の変更を行った。

**下層確認調査** 旧石器時代の下層(ローム層中)の確認調査は、調査区全域に2m×2mの調査坑を調査対象面積の4%設定したが、礎が1点出土したのみで、本調査には至らなかった(第3図)。また、傾斜地についてはロームが二次堆積となっており、確認調査は実施しなかった。

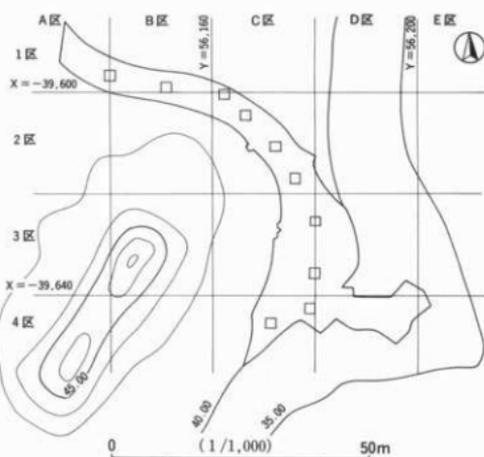
**本調査** 確認調査の結果に基づき、上層は調査対象範囲の



第2図 グリッド設定

全面を本調査とした。

**遺構番号** 調査時点において、検出された遺構に対して精査を行った順に001号跡、002号跡……のように一連番号を付した。本書では、調査時の遺構番号を踏襲して表記していく。整理段階において遺構と判断しかねるものを除外した際、混乱を避けるために遺構番号の変更をしなかったため、遺構番号に欠番が生じていることを付言する。



第3図 下層確認グリッド配置図



第4図 名城遺跡周辺の地形

## 2 遺跡の位置と環境

名城遺跡は、千葉県山武郡松尾町八田字名城3,385ほかに所在する。遺跡の所在する山武郡松尾町は、千葉県北部に広がる下総台地南東部に位置し、成田市三里塚付近の谷々に源を発する木戸川によって樹枝状に開析された台地と、肥沃な浜谷平野によって形成される。名城遺跡は、松尾町のほぼ中央に当たり、新東京国際空港付近に源を発する栗山川下流右岸の小支谷と、木戸川下流左岸の小支谷に挟まれた樹枝状台地の端部で、南東方向に延びる標高40m前後の小さな舌状台地上に立地する（第4図）。

本遺跡の周囲には、蕪木5号墳を初めとする蕪木古墳群、蕪木城跡など多くの遺跡が存在し、調査された遺跡も少なくない。次に、これらの遺跡を本遺跡に関連する時代別に概観しておきたい（第5図）。

縄文時代の遺跡では、小支谷を挟んで北側の台地上に位置する山武姥山貝塚<sup>11</sup>が樺式遺跡として著名である。晩期を中心に前期からの土器群など多量の資料が得られている。また、本遺跡から北東へ3kmの坂田池遺跡<sup>12</sup>からは独木舟が出土している。

弥生時代の遺跡は少ない。本遺跡から10km程離れるが、道庭遺跡<sup>13</sup>では中期後半から後期にかけて竪穴住居跡が数多く検出され、集落を展開している希少な例となっている。また、本遺跡と同様に東海地方からの搬入品を出土している点においても注目される。

古墳時代の遺跡としては、木戸川左岸の台地上に御田台遺跡<sup>14</sup>を初め、成田松尾線の過去の調査によって多くの遺跡が報告されており、大規模な集落が展開していたことが窺える。また、本遺跡の周辺には古墳群が多く分布していることが知られている。特に、本遺跡に隣接する蕪木古墳群<sup>15</sup>の概略をまず述べる。中でも最大規模のものは、朝日ノ岡古墳（1号古墳）で、全長70mの前方後円墳である。埴輪列が配置されていた。また、蕪木5号墳は前述のとおり本遺跡から数m程の距離にある。全長47mの前方後円墳で、玄室から金銅製巾着形容器や金銅装小刀が検出されていることで著名である。そのほかに前方後円墳2基、円墳14基が所在する。

その他の古墳群<sup>16</sup>の分布を概観すると、木戸川中流域左岸台地上に中台古墳群（国指定遺跡となった殿塚・姫塚を含む前方後円墳2基、円墳16基）が所在する。下流域右岸台地上に金尾古墳群（前方後円墳1基、円墳14基、方墳1基）、下流域左岸台地上には、大堤古墳群<sup>17</sup>（前方後円墳2基、円墳5基）が所在する。特に、大堤権現塚古墳は全長117mを測り、山武地方最大の規模を有する古墳である。頭椎大刀、圭頭大刀、金銅製刀子鞘、金銅製耳飾など多くの副葬品が検出されている。

古代の遺跡としては、重脛文瓦を出土する遺跡として小川廃寺跡<sup>18</sup>が知られている。真行寺廃寺跡<sup>19</sup>からは、「武射寺」と墨書された土器が検出され、郡寺であることが判明している。隣接する輪戸東遺跡<sup>20</sup>では巨大な掘立柱建物跡が確認されており、武射郡の郡衙と考えられるようになっていく。また、比良台遺跡<sup>21</sup>では竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数検出されている。

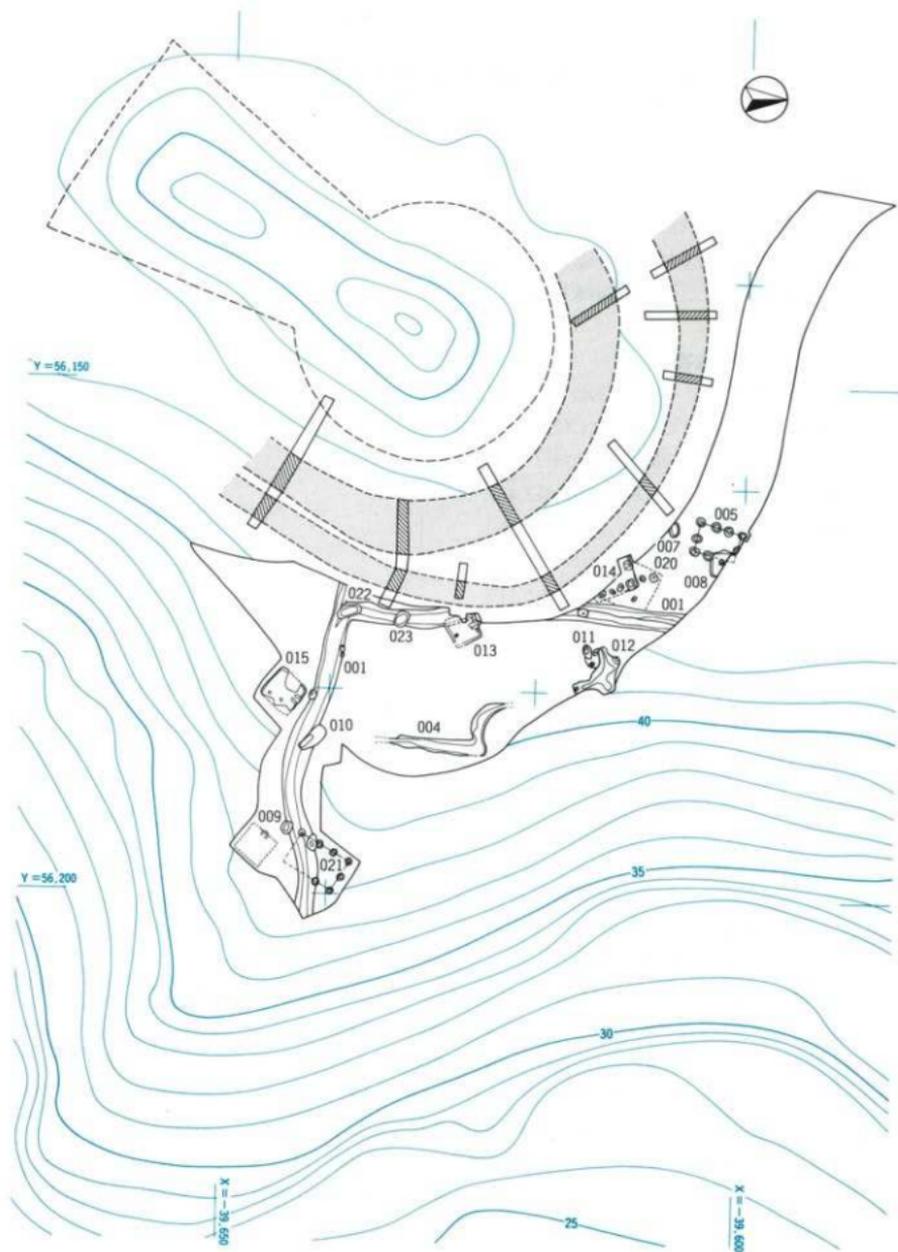
中世の遺跡としては、同一台地上に蕪木城跡<sup>22</sup>、八田砦跡、松尾城跡<sup>23</sup>が所在する。蕪木城では高砂、最上、音羽の3つの郭が、松尾城では土塁（物見台）が確認されている。北東の台地上には中世城郭の典型例とされる坂田城跡<sup>24</sup>が所在する。栗山川流域を所領とする井田氏の本城であった。木戸川対岸には山室城跡が所在する。



- |          |           |
|----------|-----------|
| 1 名城遺跡   | 10 小川庵寺跡  |
| 2 山武蛇山貝塚 | 11 真行寺庵寺跡 |
| 3 坂田池遺跡  | 12 輪戸東遺跡  |
| 4 道庭遺跡   | 13 比良台遺跡  |
| 5 御田台遺跡  | 14 蕪木城跡   |
| 6 蕪木古墳群  | 15 八田砦跡   |
| 7 中台古墳群  | 16 松尾城跡   |
| 8 金尾古墳群  | 17 坂田城跡   |
| 9 大堤古墳群  | 18 山室城跡   |

第5図 名城遺跡周辺の遺跡 (1/50,000)

- 注 1 郡淳一 1990 『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 2 (財)千葉県文化財センター 1986 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)-千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区-』
- 3 有沢要・石本俊則・小高春雄 1983 『道庭遺跡』 道庭遺跡調査会  
川島利通 1994 『東金市道庭遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 4 渡邊高弘 1992 『主要地方道成田松尾線VII-芝山町御田台遺跡・小池新林遺跡-』 (財)千葉県文化財センター
- 5 平岡和夫ほか 1995 『蕪木5号古墳』 山武考古学研究所
- 6 千葉県教育委員会 1990 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』
- 7 松尾町の歴史編さん委員会 1984 『松尾町の歴史 上巻』 松尾町
- 8 注7に同じ
- 9 谷川章雄ほか 1985 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告-鍛冶工房の調査-』 成東町教育委員会
- 10 (財)山武郡市文化財センター 1992 『鴨戸東遺跡』『財団法人山武郡市文化財センター年報No.7』
- 11 山口直人 1992 『比良台遺跡群』 (財)山武郡市文化財センター
- 12 (財)山武郡市文化財センター 1992 『蕪木城跡』『財団法人山武郡市文化財センター年報No.7』
- 13 (財)山武郡市文化財センター 1996 『松尾城跡B区』『財団法人山武郡市文化財センター年報No.11』
- 14 三島正之 1996 『坂田城跡』『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II-旧上総・安房国地域-』  
千葉県教育委員会



第 6 図 名城遺跡遺構配置

0 (1/500) 25m

## II 縄文・弥生時代

### 1 概要

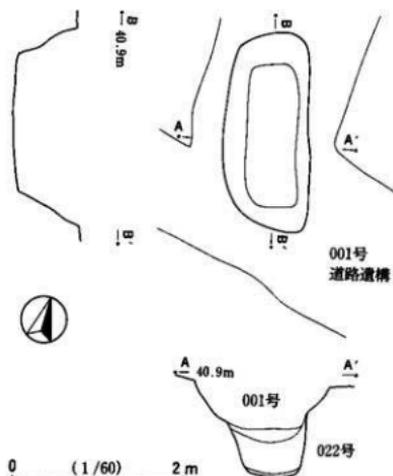
本遺跡の縄文時代の遺構は、土坑1基のみである。ただし、遺物が伴出しないために、第5章で扱った土坑の中にも縄文時代に該当するものが存在する可能性もある。弥生時代の遺構は検出されていない。遺物については、ほとんどの遺構の最上層から縄文土器の小片が検出されている。特に荒海式に比定される土器片が多い。また、弥生時代の水神平Ⅱ式土器の小片の出土も注目される。

### 2 遺構と出土遺物

#### 022号土坑 (第7・10図、図版2・11)

調査区の中央部、3C86・87区に位置する。001号道路遺構の更に下部から検出された。平面形状は不整長方形である。規模は長軸長2.4m、短軸長1.0m、深さ1.1mを測る。長軸方位はN-16°-Wである。壁は、短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がっているが、長軸方向ではやや傾斜を持って立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。覆土は、最上層にロームが張られており、001号道路遺構のために突き固められていた。他の層は暗褐色土を主体とする。最下層には暗黄褐色土が堆積しており、自然堆積状況を呈している。

遺物は、石鏃の未成品(2)が1点検出されている。石材はチャートである。



第7図 022号土坑

### 3 遺構外出土遺物

#### (1) 土器 (第8・9図、図版8)

本遺跡から出土した縄文土器は図化可能なもので107点であり、早期から晩期までの型式にわたっている。中でも、晩期の荒海式土器に比定される条痕文系土器が大半を占める。また、微細縄文を施すものも多く検出されている。本遺跡出土の荒海式土器は、縄文や細密条痕による地文の上に直接工字文を施すという技法がとられており、荒海式の中でも最も新しい時代のもと考えられる。見方によっては弥生時代前期から中期初頭とすることも可能な段階のものである。そこで、時代の決定については、今後の資料の増加と検討に委ねることとし、この稿では縄文晩期から弥生時代として一括して取り扱うこととする。また、わずか3点の小片ではあるが、弥生前期から中期初頭に相当する東海系の水神平Ⅱ式土器が検出されていることは注目すべき点である。

しかしながら、遺存度の高い遺物は少なく、復元はおろか接合できるものもほとんどなかった。検出状況についても、傾斜地であるため、ほとんどの土器片がより新しい時代の遺構への二次堆積に伴う流れ込みと考えられる。そこで、この場では図化できうる限りのものを提示し、資料紹介にとどめることとする。また、器形の判別、各土器片の個体識別についても困難であり、本来同一個体である土器が、別の個体番号となっている例が含まれる可能性が高いことを付言しておく。

遺構外出土土器を大別すると、以下のとおりに分類される。さらに、縄文晩期から弥生時代の土器については、文様による分類にしたがって細分を行う。

第Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器

第Ⅱ群土器 縄文時代前期・中期の土器

第Ⅲ群土器 縄文時代晩期から弥生時代の土器

第Ⅳ群土器 弥生時代前期から中期初頭の土器

#### 第Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器（第8図、図版8）

本群の土器は、早期前葉の夏島式土器と早期後葉の子母口式土器、野島式土器、芽山下層式土器に分類できる。

##### 第1類 早期前葉の燃糸文系土器（1）

1は夏島式土器に比定される。器面に縦走する燃糸文が施文されている。原体はRである。燃糸の間隔は比較的広くなっており、条間も疎らである。

##### 第2類 子母口式土器（2）

2は平縁の口縁部で、口唇部には方形の連続刺突列が施されている。口縁下35mmの部分に連続刺突文が施されている。裏面はよく磨かれている。胎土には繊維を多量に含んでいる。

##### 第3類 野島式土器（3～5）

3は平縁の口縁部である。縦走する微隆起線と横走する微隆起線が施されている。器厚は7mm～10mmと厚く、繊維も多く含んでいる。内面は貝殻でナデを行った後、削られた痕跡が観察される。4は上部に微細な沈線が斜位に施されており、その直下に梯子状の微隆起線文が横位に見られる。斜位に施された微隆起線文の条間が約10mmで、それに直交する方向でより条間の狭い微隆起線文が施される。器厚は3に比して薄く、5mmほどである。5は4に類似した小片であるが、梯子状の微隆起線文が斜位に施されており、4に比して条間が狭い。4・5は3以上に繊維を多く含む。

##### 第4類 芽山下層式土器（6）

6は貝殻背圧痕文が浅く施されている。器厚は10mmを測る。胎土には繊維を含む。

#### 第Ⅱ群土器 前期・中期の土器（第8図、図版8）

本群の土器は前期中葉の黒浜式土器と植房式土器、前期後葉の浮島式土器、更に中期の土器に分類される。

##### 第1類 黒浜式土器（7～13）

7は半截竹管によると思われるコンパス文と条痕文が施され、8はコンパス文と単純な押し文が施されている。9・10はRLの縄文が施文されている。11はLの燃糸文が施文されている。12はLRによる斜位の縄文と沈線による横位の施文が見られる。13は羽状縄文が施文されている。いずれも胎土に繊維を多く含むが、特に7～9・12・13は顕著である。

## 第2類 植房式土器 (14・15)

14は10mmほどの無文部分を挟んで、上部には5本の沈線が横走り、下部には数本単位の沈線が横位に施されている。15は14の下部に類似した沈線が施される。どちらも胎土には繊維を多量に含む。

## 第3類 浮島式土器 (16)

16は上部には三角文が施文されており、下部には横位の沈線が施されている。

## 第4類 中期の土器 (17)

17は無節縄文Lが施文されている。胎土に繊維を含まないので中期の範疇と判断される。

## 第III群土器 晩期から弥生時代の土器 (第8・9図、図版8・9)

本群の土器は前述のとおり文様によって分類を行う。荒海式土器に比定される変形工字文、菱形文、貝殻条痕文、細密条痕、微細縄文、底部に分類される。中には小片であるため文様の全体像がつかみにくい沈線もあるが、広い意味で変形工字文の範疇でとらえることとした。

### 第1類 変形工字文 (18~61)

#### 第1種 交点に深いえぐりを施すもの (18~22)

20は水平な沈線と斜行沈線との交点を深くえぐることによって変形工字文としている。18・19・21・22は交点周囲の全容は明らかではないが、同様なものと判断される。18は地文として単節のLRが施されている。

#### 第2種 交点に深い刺突を施すもの (23・24)

23・24は変形工字文の交点が深い刺突によって代用されており、第1種に比して単純化が図られている。

#### 第3種 交点に短い沈線を施すもの (25)

25は変形工字文の交点が縦の短い沈線となり、更に単純化が図られている。

#### 第4種 横位や斜位に沈線を施すもの (26~45)

26は波状口縁である。地文にLRの縄文が施されており、その上に2本~3本を単位とした沈線が施される。27は口縁部で緩やかに外反している。表面はよく磨かれている。28・29も口縁部である。30は地文としてLRの縄文が施文されている。37は細密条痕文が縦位に施文されている。38・39はRLの縄文が施文されている。40は斜位に貝殻条痕文が施されている。地文を施したものはいずれも地文の上に直接沈線が施されている。43は細密条痕を地文とした上で、菱形を形成するように沈線が施されている。44・45は沈線の接する方向が他のものに比して特殊なものである。45は撚糸文を地文とする。

#### 第5種 短い沈線を施すもの (46~53)

46~53は短い沈線を伴っている。46は細密条痕文を地文とする。51はRLの縄文を地文としている。

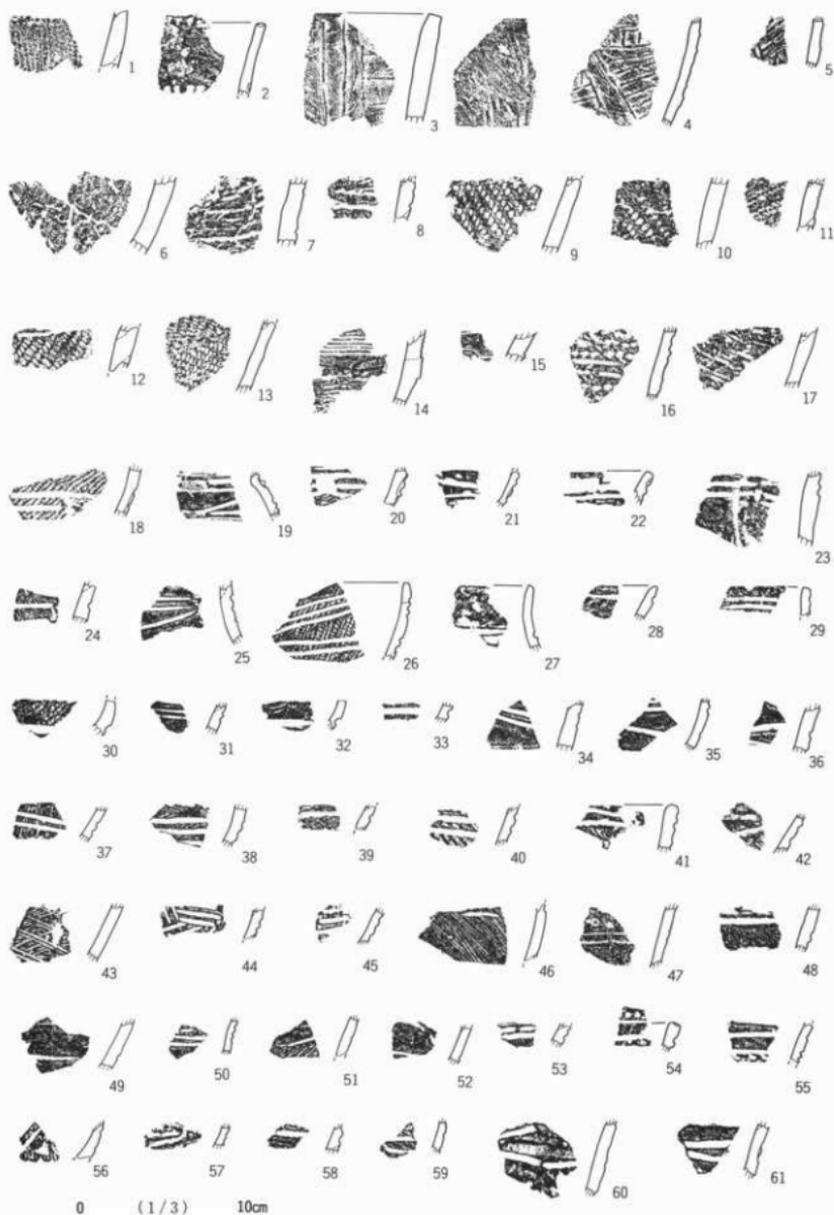
#### 第6種 刺突を伴うもの (54~56)

54は口縁部である。口縁から10mmの部分に沈線が横走りしている。口唇部上面には刺突列が施されている。55は横走する沈線の直下に刺突列が施文されている。56は中央の三角文の下に三角状の刺突が施されている。細密条痕を地文とする。

#### 第7種 曲線的な工字文を施すもの (57~59)

57は押しつぶされた「の」の字状に沈線がめぐり、1単位を成しているように判断される。59はハンガ一状の沈線文を形成する一部と判断される。地文に貝殻によると思われる条痕が施文されている。

## 第2類 菱形文 (60・61)



第8圖 第I群・第II群(1)土器

60・61は菱形文である。小片であるため明らかではないが、この菱形文が横位に連続して施されていると思われる。

### 第3類 貝殻条痕文 (62～77)

62は口縁部である。62～76は条痕の原体がサルボウの貝殻と思われる。77は他の貝殻条痕に比して条痕の間隔が広く、原体がサルボウとは異なると考えられる。また、小片であるため明確ではないが、胎土に石英粒や砂粒を多く含むこと、さらに、深鉢形土器と思われる底部の最下部まで丁寧に横位の条痕が施されていることから、搬入品である可能性が考えられる。

### 第4類 細密条痕文 (78～89)

78～89は細密条痕文が施されている。原体は結束具や板目であると考えられる。

### 第5類 微細縄文 (90～101)

90は波状口縁である。単節LRが施文されている。99～101は微細な撚糸文が施されている。

### 第6類 底部 (102～107)

102～106は縄文が施文されている。特に104・105は最下部まで施文されている。107は細密条痕が施文されている。

## 第IV群土器 弥生時代前期から中期初頭の土器 (第9図、図版8)

この群の土器はわずかに小片3点であるが、貴重な資料であると考え、敢えて第IV群とする。

### 第1類 水神平Ⅱ式土器 (108～110)

108～110は胎土から明らかに他の土器との違いが見られる。明緑褐色で砂粒などを多く含む胎土であり、東海系の搬入品であると判断される。108は口唇部に両側からつまみ上げたようなアクセントが付けられており、2条の貝殻条痕文が施されている。深鉢形土器の口縁部であると思われる。口縁部直下に横位の貝殻条痕文が施文されている。109は横位の貝殻条痕文の直上に波状文風の施文がなされている。110は109と同様の波状文の一部であると思われるが、折り返し部が109よりも尖るので波状文の上部であると考えられる。しかし、一般的な波状文が右上がりになるのに対し、本遺跡出土の2点はいずれも左上がりになっている点は注目される。

### (2) 石器 (第10図、図版11)

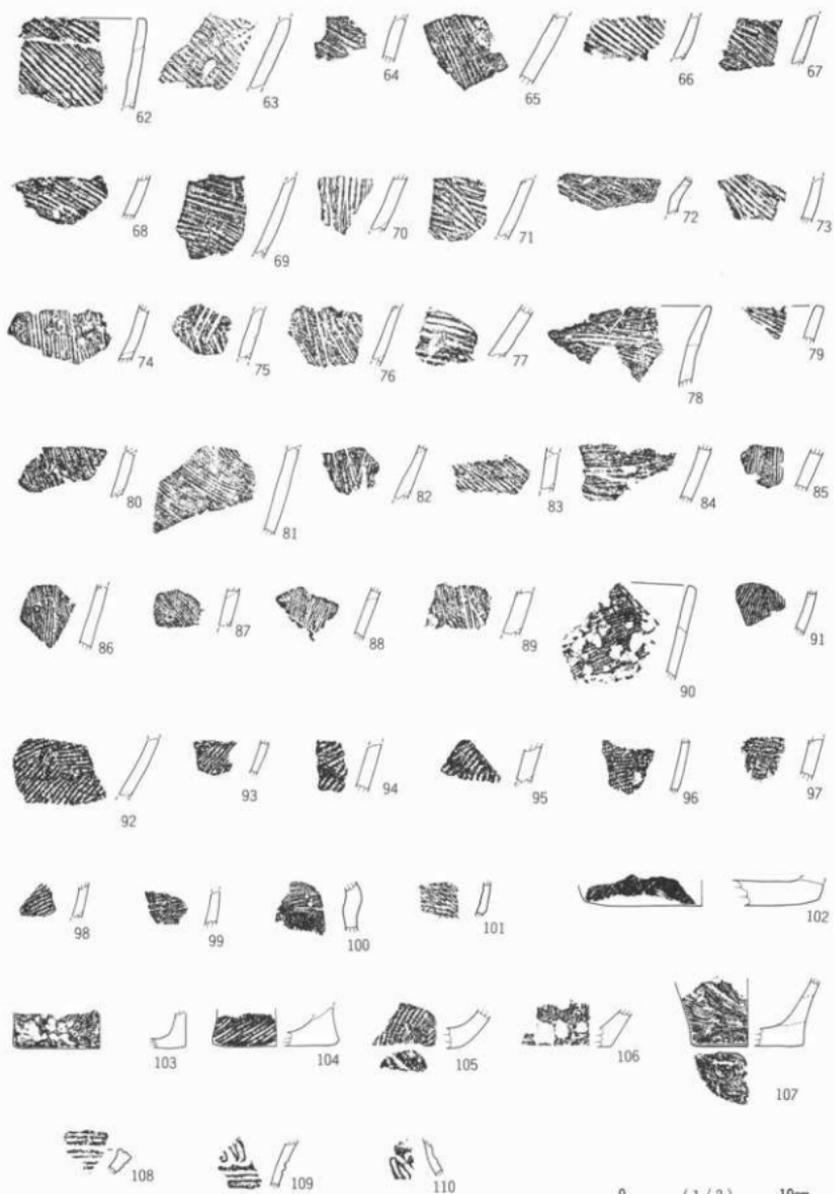
本遺跡から出土した石器は総数6点である。検出状況は土器片と同様、そのほとんどがより新しい遺構の覆土上層への流れ込みによるものである。本遺跡で出土した土器が縄文時代晩期から弥生時代に集中するところから、石器の時期についても縄文から弥生時代と考えられる。

**未成品 (1～3)** 1・2ともチャート素材を石材とする石鎌の未成品である。1は縦長剥片を素材とする。主に周縁部を平面的に調整している。2は022号土坑内から検出されたものである。横長剥片を素材とする。両側縁及び基部を集中的に調整している。背面の基部付近にはまだ自然面が残されている。3は珪質頁岩を素材とした二次加工を有する剥片である。両側縁に調整加工が認められる。

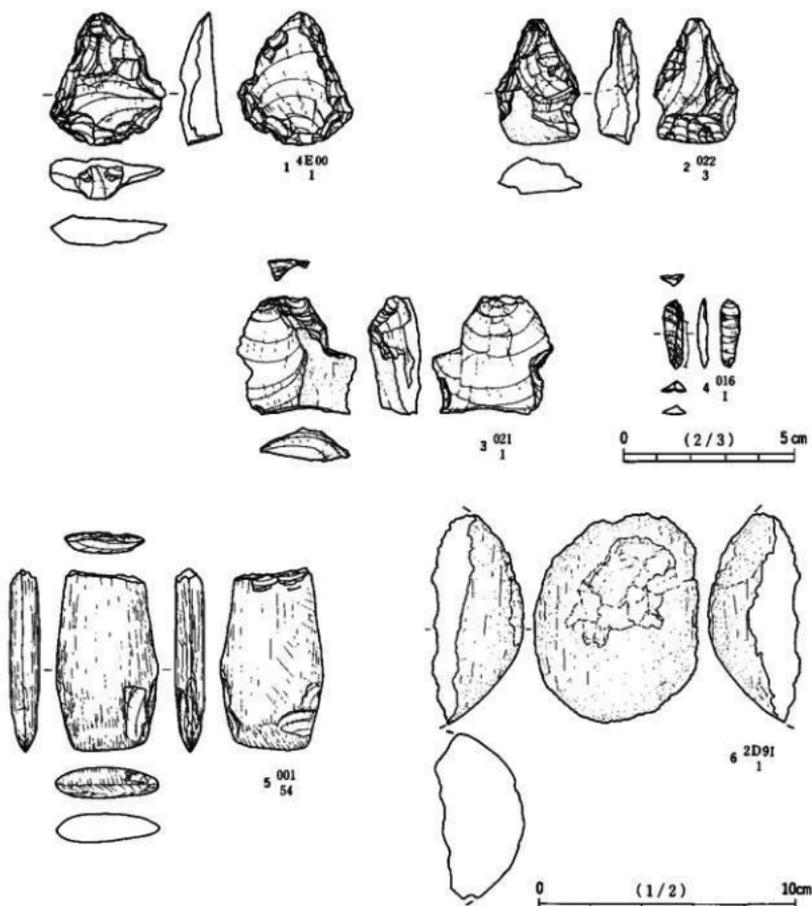
**使用痕を有する剥片 (4)** 4は黒曜石を石材とする剥片である。右側縁に微細な加工痕が見られる。上下端部から微細な加工痕が認められ、楔形石器から剥がされた剥片である可能性が高いと思われる。

**磨製石斧 (5)** 5は磨製石斧である。両刃であり、刃部は水平に整えられている。平面形状では中央がやや膨らんでおり、刃部に近い部分が最大幅となっている。石材は緑泥片岩である。

**磨石 (6)** 6は楕円盤の一部分である。両側面に磨られた痕が観察される。石材は石英斑岩である。



第9圖 第II群(2)・第III群・第IV群土器



第10図 出土石器

第1表 出土石器属性表

図版 番号	部 種	石 材	長さ×幅×厚さ (mm)	重 量 (g)	遺物番号	図版 番号	部 種	石 材	長さ×幅×厚さ (mm)	重 量 (g)	遺物番号
1	石鏃半成品	チャート	38.9×33.7×12.3	12.0	4 E00-1	4	燧石	黒曜石	20.3×6.2×3.1	0.2	16-1
2	石鏃半成品	チャート	36.7×25.0×12.6	9.2	22-3	5	磨製石器	緑泥片岩	44.1×24.9×7.0	13.2	1-51
3	R制片	陸奥頁岩	34.6×34.6×15.4	15.2	21-1	6	磨石	石英凝岩	81.3×35.8×64.0	180.0	2 D91-1

### III 古墳時代

#### 1 概要

本遺跡の古墳時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、道路遺構1条のみである。いずれも隣接する蕪木5号墳の付近に検出されている。住居跡からの遺物は少ないが、道路遺構からは土製小玉や赤彩された小形埴などが検出されている。道路遺構はその配置などから蕪木5号墳の墓道である可能性が高いと考えられる。

#### 2 遺構と出土遺物

##### 014号竪穴住居跡（第11図、図版3）

調査区の中央部、2C53・54・64・65区に位置し、台地縁辺部のほぼ平坦面に立地する。住居跡南西部2/3は調査区外である。ルームへの掘り込みが浅いため、周囲の壁の立ち上がりは確認できなかった。規模は柱穴の配置から主軸方向に4.5m程度と想定される。北西壁については、3.3mまで確認された。主軸方位はN-20°-Wである。覆土は最上層に硬化したルームブロックが検出され、この住居跡の上に、より新しい020号住居跡の存在が確認された。第2層以下はルーム粒を少量含む暗褐色土が主体で、自然堆積状況を呈している。周溝は北西側壁面にのみ検出された。幅約22cm、深さ約7cmを測る。床面は住居跡中央が硬化しており、特に一点鎖線で囲んだ内側の範囲は顕著であった。床面にピットが3か所確認された。主柱穴と思われる2か所は、径約50cm～54cm、深さ15cmと63cmを測る。抜き取り痕と思われる形態を持つ。柱間寸法は1.2mを測る。住居跡北東側コーナー部分には貯蔵穴が検出された。長軸長約100cm、短軸長約30cmを測り、深さは約30cmを測る。三方の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東側の壁は約50°で立ち上がり、住居跡の壁に接する。

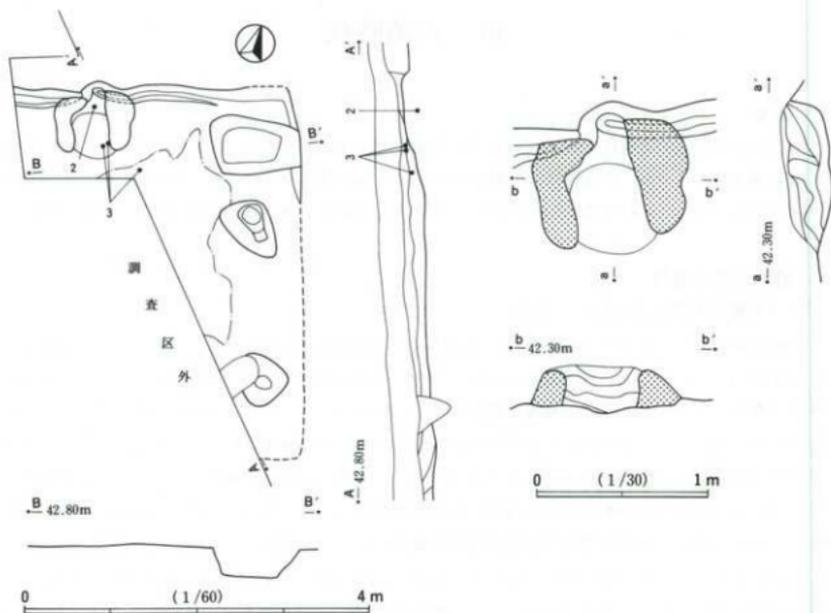
カマドは、北西壁に位置する。全長約94cm、幅約90cmを測る。袖部は壁から約70cm延びているが、壁面に取りついてはいない。構造材は山砂を主体とする。内側は被熱し、赤化していたがあまり固くない。覆土は大きく3層に分かれ、下層がルーム粒を多量に含む褐色土、中層が焼土粒子を多量に含む赤褐色土、上層がルーム粒を少量含む暗褐色土である。煙道部は約77°で立ち上がる。

遺物は、カマド周辺より出土した。図示可能なものは土師器3点である。1は高杯の体部である。内外面に赤色塗彩が施されるが、磨耗が著しい。2・3は甕の口縁部である。2は胴が丸く張る形態のものである。3は口縁部が緩やかに外反する。

##### 001号道路遺構（第12・13図、図版3・9）

調査区の台地縁辺部及び斜面部の2C・3C・4D区に位置する。道路遺構を調査区東端の谷部から概観する。斜面を緩やかにカーブを描きながら西へ約30m登り、台地上で分岐する。一方はほぼ直角に折れ、台地縁辺部を北方向へ延びる。調査区の形状の変化により一度調査区を出るが、約35m検出され、更に北へ延びる。もう一方は幅を狭めて、数m先の蕪木5号墳に向かってまっすぐに延びている。

道路遺構は幅約1.6m～2m、深さ約30cm～65cmを測る。断面の形状は、0.8m～1.2mを底部とし、弧を描きながら立ち上がっている。斜面部では底部に硬化面が広く確認され、道路遺構と判断された。また、斜面部には柱穴状のピットが道路遺構の縁部に3か所検出された。覆土は斜面部では下層がルーム粒を多く含む粘性のある明褐色土、上層がルーム粒を含む暗褐色土であった。台地縁辺部では下層がルーム粒を

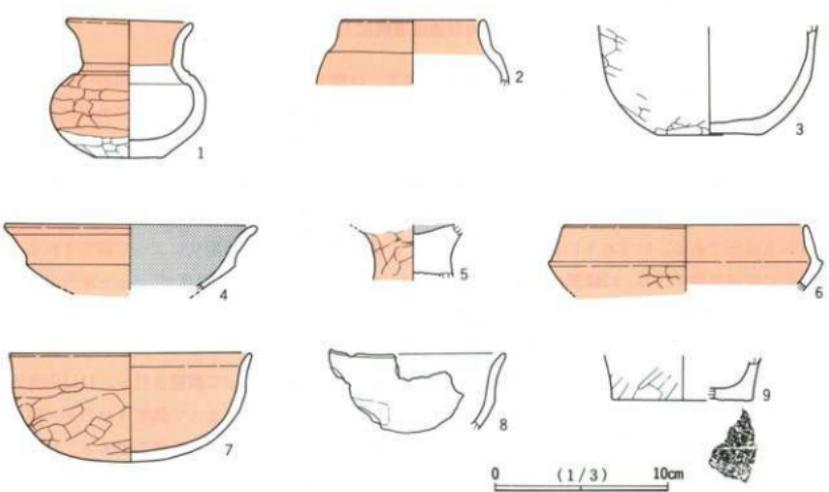
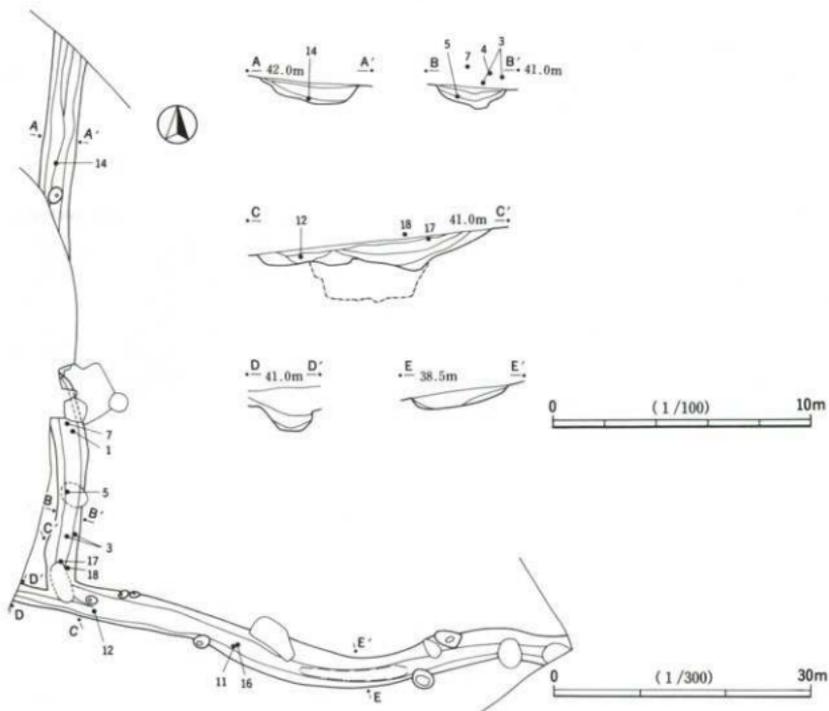


第11図 014号竪穴住居跡及び出土遺物

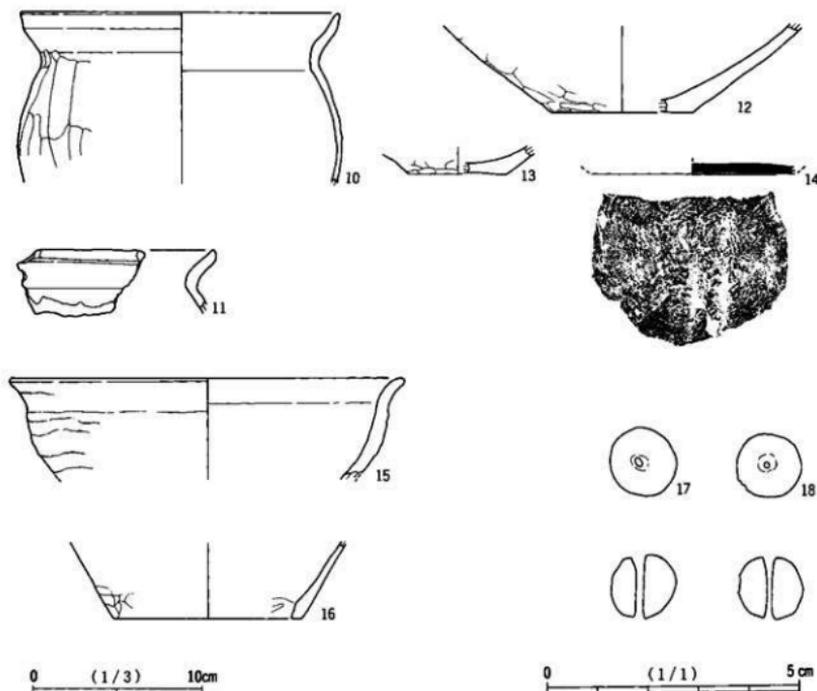
多く含む褐色土、上層が比較的しまりの弱い暗褐色土であった。斜面部と台地縁辺部で覆土の違いがあるため、分岐点において新旧関係をつかむべく土層観察を行ったが、分岐する3本とも同時期に共存する状況が窺えた。

台地縁辺部において013号竪穴住居跡（平安時代）と重複していた。道路遺構の覆土中に013号住居跡の床を確認し、甕、紡錘車が検出されたことから、001号道路遺構の方が013号竪穴住居跡よりも時代が遡ることが判明した。

遺物は台地の縁辺部と谷部との交点付近に多く出土している。図示できたのは土器器16点、須恵器甕底



第12図 001号道路遺構及び出土遺物(1)



第13図 001号道路遺構出土遺物(2)

部片1点、土製小玉2点である。1は小形埴である。頸部には横方向のナデ、体部は横方向のヘラ削りによって調整される。最大径は胴部の9.0cmである。2は小壺の口縁部である。内面は横方向のナデによって調整される。3は小形壺の底部である。内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ削りによって調整される。4は高杯の口縁部である。横方向のナデ、体部はヘラ削りによって調整される。5は高杯のくびれ部破片である。内面はナデ、外面はヘラ削りによって調整される。1・2・4・5は赤彩が施される。

6～8は杯である。いずれも口縁部は横方向のナデ、体部は手持ちのヘラ削りによって調整される。6は外面に明確な稜を持ち、口縁部は内傾する。須恵器杯身模倣杯である。7は器高が6.3cmと深型のものである。6、7は赤彩が施される。8は口縁部片である。9～13は土器器甕である。9・12・13は底部である。いずれも内面はナデ、外面はヘラ削りによって調整される。9は底部に木葉痕が残存する。10・11は口縁部である。10は口縁部が横方向のナデ、体部は縦方向のヘラ削りによって調整される。11は内外面ともにナデによって調整される。14は須恵器甕の底部片である。内面はナデによって調整されるが、底部は無整形であり、製作時に下に敷かれたと思われる縄の痕跡が観察される。器色は黄橙色である。15は土器鉢である。内面はナデ、口縁部内面は横方向のナデによって調整される。口縁部の外面は横方向のナデによって調整される。体部には粘土紐接合痕が確認される。16は土器器甕の底部片である。内面はナデ、

外面及び、底部はヘラ削りによって調整される。単孔である可能性が高い。17・18は土製小玉である。どちらも先端の尖った工具を用い、両端からの刺突で孔を形成する。表面は丁寧に磨かれている。

## IV 平安時代

### 1 概要

本遺跡の平安時代の遺構は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、土坑1基である。竪穴住居跡、掘立柱建物跡ともに台地上ばかりではなく、谷に降りる斜面にも検出されている点が注目される。013号竪穴住居跡からは灯明皿として使用された土師器杯が数多く出土している。また、杯の中には墨書土器、線刻土器も含まれていた。

### 2 遺構と出土遺物

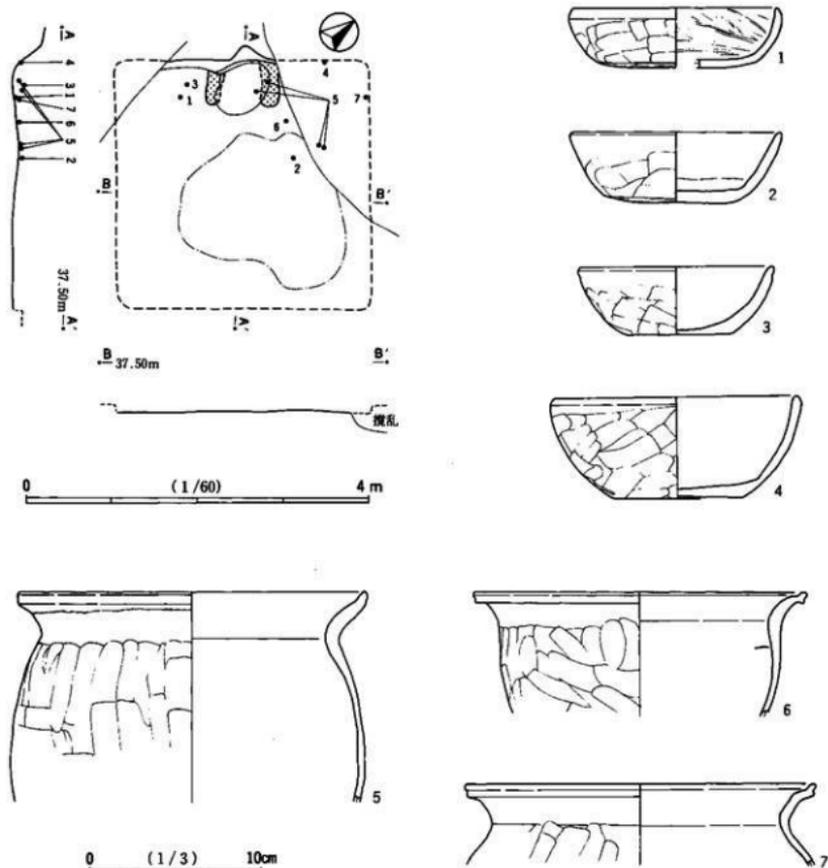
#### 009号竪穴住居跡（第14図、図版4・9）

調査区の南東部、4 D27・37・38区に位置し、台地上から4mほど降りた斜面に立地する。硬化面とカマドの痕跡により住居跡と確認できた程度で、遺存状態は悪かった。カマド付近の壁高は19cmを測るが、その他では壁の立ち上がりは認められない。床面は軟弱であるが、カマド付近から南東方向に一点鎖線で示した範囲の内側のみ堅牢であった。柱穴も確認できなかった。覆土は粘性の強い褐色のロームが堆積していた。斜面から流れ込んだものと判断される。カマドは袖部が崩壊していたが、床面にその痕跡が認められたため図示した。北西壁に位置する。主軸方位はN-50°-Wである。全長約80cm、幅約85cmを測る。袖部は壁から約52cm延びている。構造材は山砂を主体とすると思われる。煙道部は約50°で立ち上がる。下部は被熱し赤化していた。

遺物はカマドの周辺から出土している。図示できたのは土師器7点である。1～4は土師器杯である。いずれも手持ちへう削りによって調整される。1は内面がミガキによって調整される。3は口縁部が横方向のナデによって調整される。内面にわずかであるが煤が付着する。4は口径が14.7cmを測る大型のものである。粗い粒子を多く含む。5～7は土師器壺である。いずれも口縁部は横方向のナデ、体部はへう削りによって調整される。5は内面がナデによって調整される。6・7は口縁部片である。7は体部が丸く張る形態のものである。

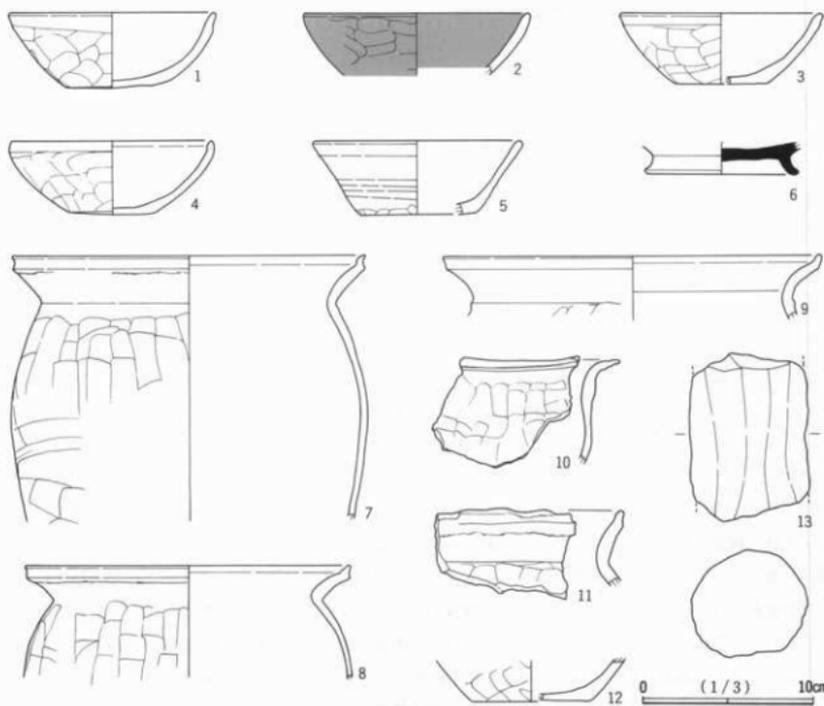
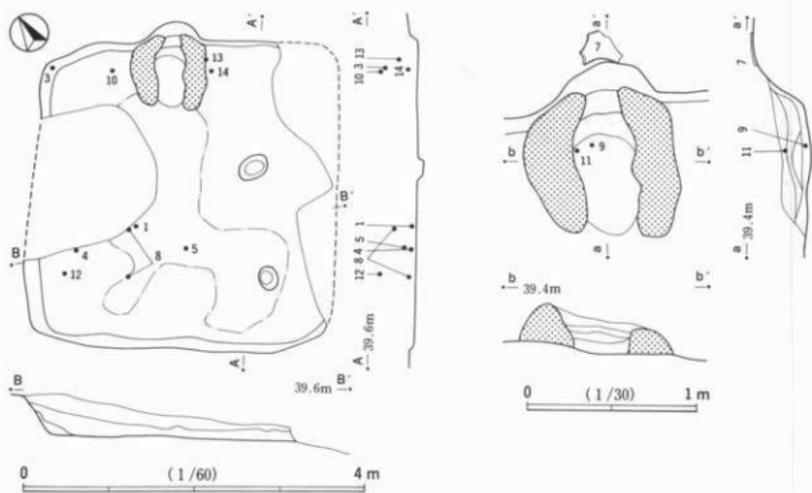
#### 015号竪穴住居跡（第15・16図、図版4・9・11）

調査区の南端、4 C19・29・4 D10・20区に位置し、南東方向の斜面に立地する。当初遺跡範囲外であったため伐採をせず現状のまま調査を行った。主軸方位はN-43°-Wである。規模は一辺が約3.7mを測り、ほぼ正方形を呈する。覆土は、中層以下は粘性が高く、よくしまった褐色土、上層はローム粒を含む褐色土・暗褐色土が主体で斜面に沿って流れ込んだ堆積状況を呈している。床面は斜面に沿ってわずかに傾斜している。住居跡南東部は斜面の最も低い部分に当たり、床、壁面ともに確認されなかった。住居跡中央部は踏みしめられて硬化が認められた。壁高は最大で58cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面上にピットが2か所検出された。径26cm・30cm、深さ11cm・19cmを測るのみで、配置からも主柱穴とは判断し難い。カマドは、北東壁ほぼ中央に位置し、住居跡の主軸と概ね一致する。全長約105cm、幅約92cmを測る。袖部は壁から約85cm延びている。構造材は山砂を主体とする。覆土は4層に分かれ、下層が焼土粒子・灰を含む暗赤褐色土、その上層がより多く灰を含む暗赤褐色土、中層が焼土粒子・山砂を含む暗褐色土、上層がローム粒・山砂を含む暗褐色土である。煙道部は約40°で立ち上がる。煙道部上部には壺の一部が検出されている。



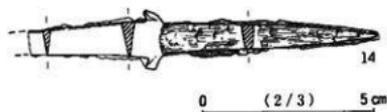
第14図 009号竪穴住居跡及び出土遺物

遺物はカマド周辺及び、住居跡西部に多く出土した。図示できたのは土師器11点、須恵器高台付杯1点、鉄刀子1点、土製支脚1点である。1～5は土師器杯である。いずれも外面はヘラ削りによって調整される。1・3は口縁部が横方向のナデによって調整される。1は完形品である。2は口縁部片である。内外面に煤が付着する。5はロクロ土師器杯である。底部はヘラ削り、体部は横方向のナデによって調整される。6は須恵器高台付杯の底部である。高台の先端はわずかに外反する。底部は回転ヘラ削りによって調整されるが、中央部に糸切り痕が残存する。7～12は土師器壺である。いずれも口縁は横方向のナデ、体部はヘラ削りによって調整される。7は口縁部に粘土紐接合痕が残る。8～11は口縁部片、12は底部片である。13は土製支脚である。上下の径がほぼ変わらないので基部に近いものと考えられる。



第15図 015号竪穴住居跡及び出土遺物(1)

14は鉄製刀子である。切先を欠く。刃部と茎との間には、背閔と閃閔の双方から突起状のものが観察される。木質が良好に遺存している。刃幅は7.4mm～11.2mm、背厚は3.5mm～4.4mm、重さは7.3gである。



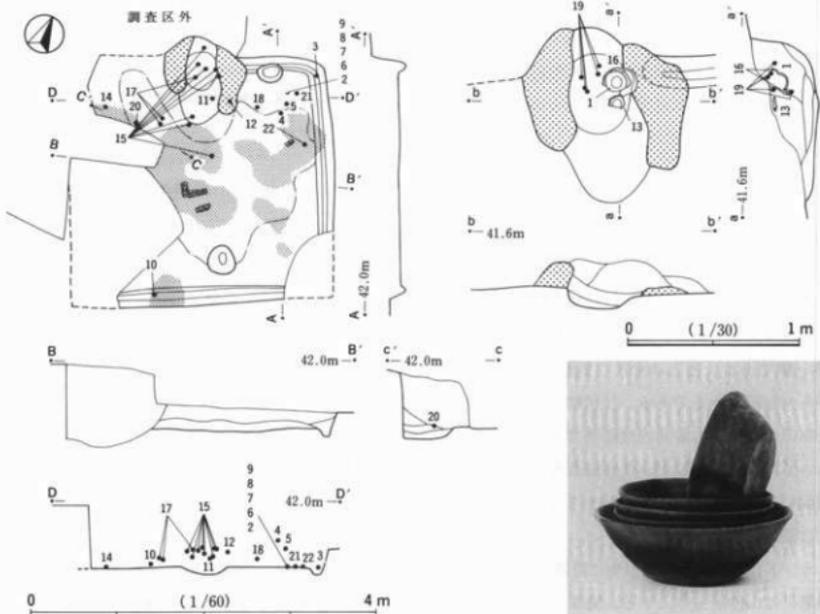
第16図 015号竪穴住居跡出土遺物(2)

### 013号竪穴住居跡(第17・18図、図版5・9・11)

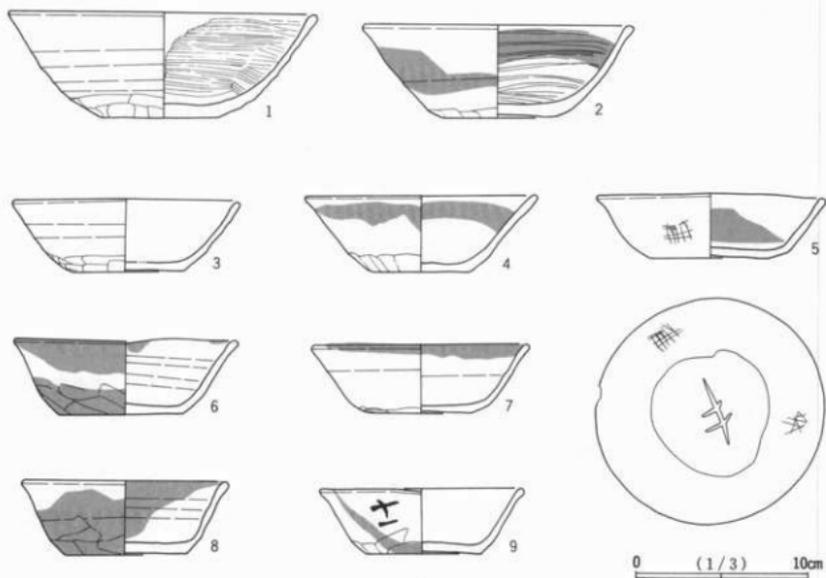
調査区の中央部、3C26・27・36・37区に位置し、台地縁辺部のほぼ平坦面に立地する。住居跡西側は調査区外であり、一部は001号道路遺構と重複する。住居跡南側の2コーナー部が攪乱を受けていたが、遺存状況は良好である。規模は主軸方向に3.2mを測り、ほぼ正方形を呈すると想定される。主軸方位はN-26°-Wである。覆土は大きく2層に分かれ、下層は焼土粒子・炭化物を多く含む褐色土、上層はローム粒子を含む暗褐色土である。住居焼失後は自然堆積状況を呈している。床面はよく踏みしめられており、中央部の一点鎖線の範囲内は顕著であった。壁高は22cm～40cmを測り、約84°で立ち上がる。周溝はカマドを除いてほぼ全周するが、住居跡西側については001号道路遺構の上に床を張っているため認められない。床面には径約32cm、深さ約25cmを測る円形のピットを検出した。これは梯子ピットと考えられるが、主柱穴は確認されなかった。

カマドは、北西壁ほぼ中央に位置する。全長約1.3m、幅約95cmを測る。袖部は壁から約75cm延びている。構造材は山砂を主体とする。焚き口から燃焼部にかけて、長軸長約48cm、深さ3.5cmを測る浅い掘り込みが検出された。覆土は大きく3層に分かれ、下層が被熱したローム粒を含む褐色土、中層が焼土粒子・灰を多量に含む赤褐色土、上層は焼土ブロックと多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土である。煙道部は約83°で立ち上がる。

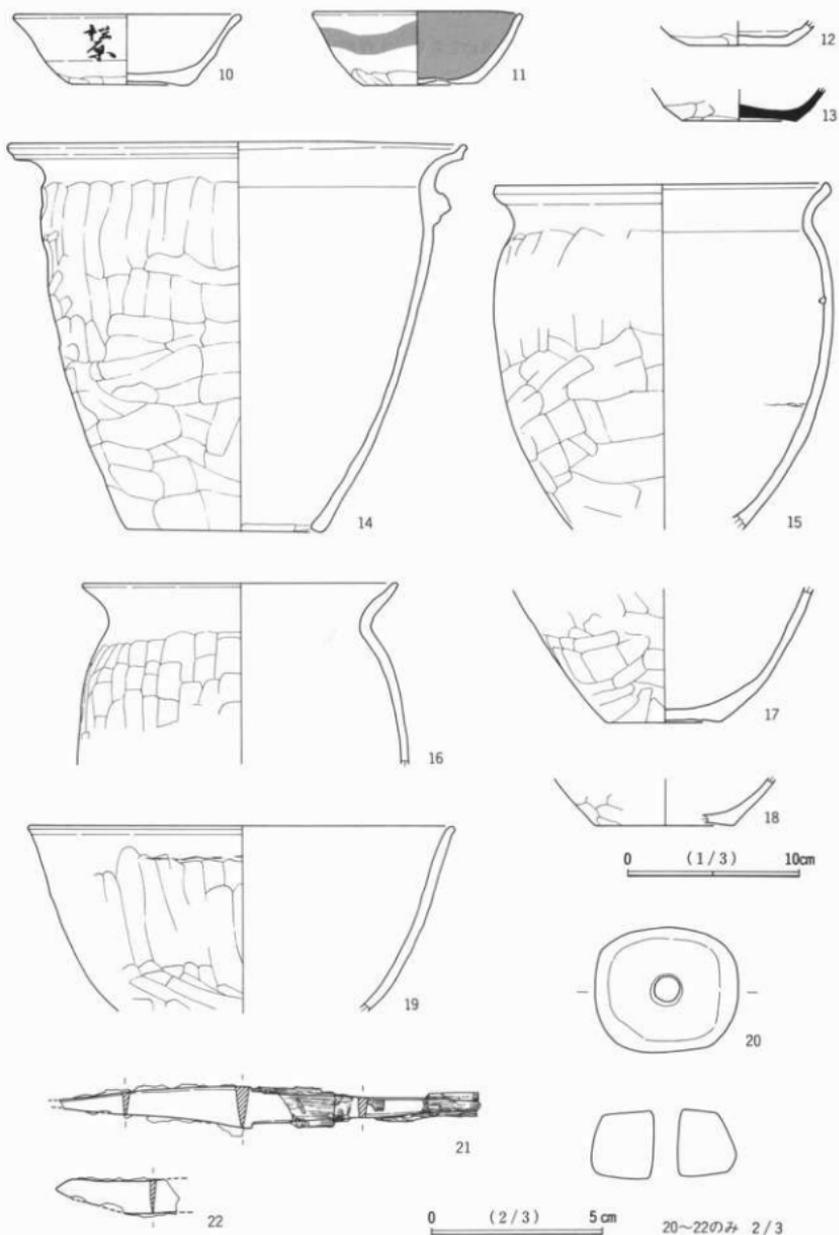
遺物は、ほとんどが床面直上より出土しており、特にカマド付近から多量に検出された。図示できたのは土師器18点、須恵器1点、石製紡錘車1点、鉄刀子2点である。1～12はクロコ土師器杯である。いずれも底部付近はヘラ削り、体部は横方向のナデによって調整される。1は口径が17.8cmを測る大形の土師器杯である。体部にはクロコ目が残る。2・4～9・11は煤が付着する。特に6～8は部分的にタール状を呈する。5は外面の両側に線刻が施されている。底部は焼成前にヘラ書きが施される。9・10は墨書土器である。9は外面に「十一」、10は外面に「松原」と読める。10・11は底部中央に回転糸切り痕が残る。11は底部を内側から穿孔している。カマド付近では、床面直上から重なったままの状態でも灯明皿と判断できる土師器杯が検出された。下から2・6・7・8・9の順であった。特に最上部に検出された土師器杯9は垂直に立てるような形で出土した。煤の付着状況から、偶然に立ったものではなく、灯明皿として立てたまま使用されたものと考えられる。12は底部である。回転ヘラ削りによって調整されるが、中央部にはヘラ切り痕が残る。13は須恵器杯の底部である。底部は一定方向の手持ちヘラ削り、体部は横方向のナデによって調整される。14は土師器甔である。把手が一部欠損している以外はほぼ完形である。底部は単孔である。検出時に上面となっていた部分に内外面とも3/5程度煤が付着していた。15～18は土師器甕である。いずれも口縁部は横方向のナデ、体部はヘラ削りによって調整される。19は胴部上半のみなので器種がはっきりしないが、鉢の口縁部と思われる。口縁部は横方向のナデ、体部はヘラ削りによって調整される。20は石製紡錘車である。両端から穿孔されている。21・22は鉄刀子である。21は切っ先を欠く。刃幅は3.5



灯皿皿桶出状況復元写真



第17図 013号竪穴住居跡及び出土遺物(1)



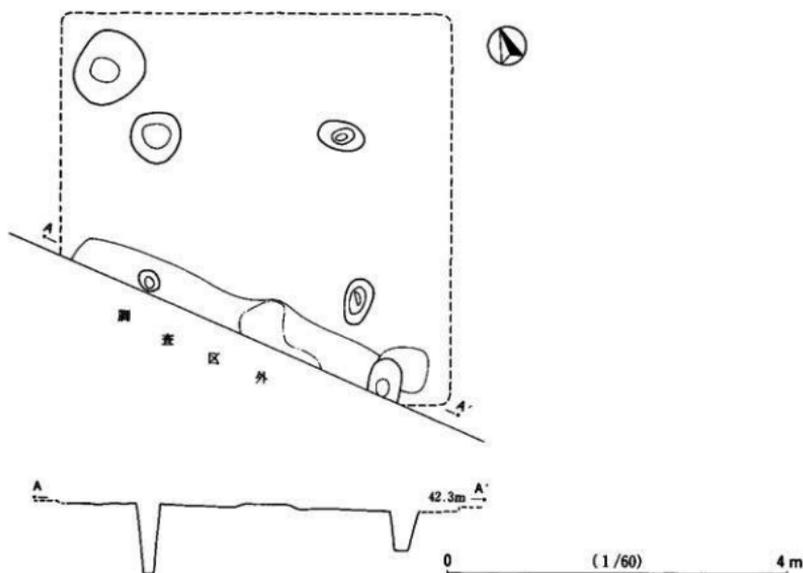
第18圖 013号竪穴住居跡出土遺物(2)

mm~9.2mm、背厚は1.6mm~4.5mm、重さは7.8gである。木質部は比較的良く遺存する。22は鉄刀子刃部である。遺存状態は悪く、鉄がめくれている。

#### 020号竪穴住居跡（第19図）

調査区の中央部、2C44・54・55・64・65区に位置し、台地の縁辺部に立地する。014号竪穴住居跡と重複して存在した。住居跡の西側1/3は調査区外となっている。床面が黒色土中に張られていたために確認されなかったが、014号竪穴住居跡調査中に床面が検出され、柱穴の配置から住居跡と確認された。遺存した床面は幅約50cmである。規模は主軸方向に4m程度と想定される。主軸方位はN-20°-Eと考えられる。覆土は地表面から床面まで約30cmを測るが、植物の根による擾乱を受けており堆積状況は確認できなかった。遺存した床面は軟弱であったが、中央には厚さ約10cm程ロームが張られ、比較的固く踏みしめられた部分を認めた。柱穴は4か所検出された。2か所は長径約56cm、短径35cmを測る楕円形を呈し、深さは71cm・94cmを測る。他は径24cmと径80cmを測る大小の円形を呈し、深さは約92cmを測る。短径約48cm、深さ約40cmの梯子穴と考えられるピットが南コーナーに所在する。住居跡の北コーナーに径92cmの円形を呈し、深さ約90cmを測る貯蔵穴が検出された。カマドはその痕跡を含めて確認できなかった。表土除去の際、誤って除去された可能性も考えられる。

遺物は出土しなかった。

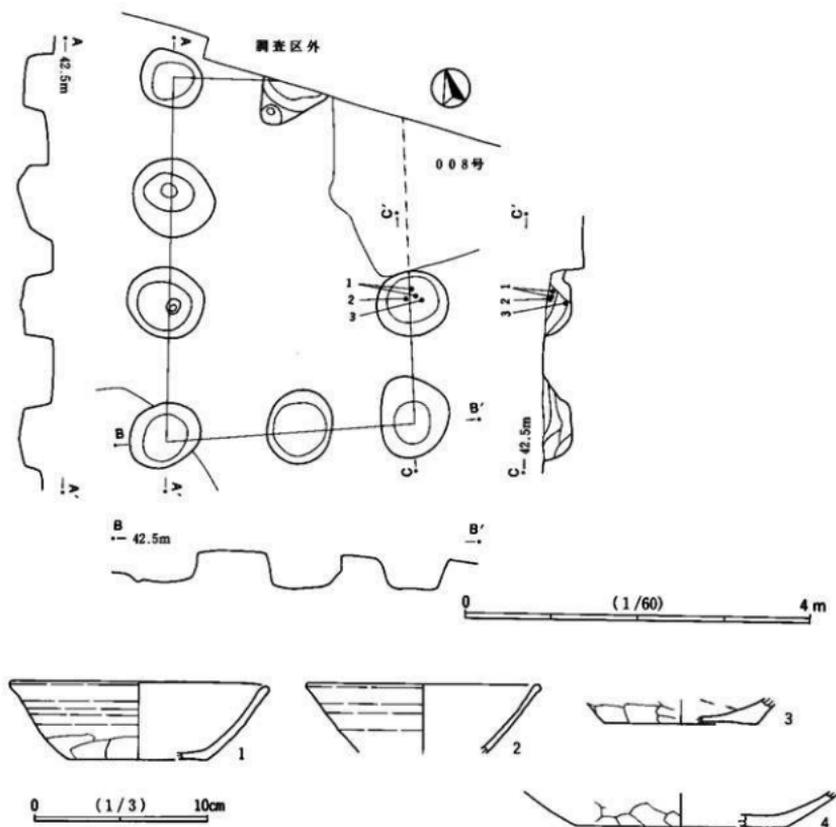


第19図 020号竪穴住居跡

005号掘立柱建物跡 (第20図、図版6・10)

調査区の北西部、2C01・10・11・12・21・22区に位置し、ほぼ平坦面に立地する。北側の柱穴が一部調査区外にかかる。全容は明らかではないが、北側梁行の大棟持柱が確認されているところから、側柱式の南側梁行2間(2.9m)×西側桁行3間(4.2m)の建物で、面積は約12㎡と考えられる。桁行主軸方位はN-17-Eである。北東側の2柱穴は後世の008号竪穴状遺構に切られて遺存していない。南側梁行の柱間寸法は60cm~78cm、西側桁行の柱間寸法は38cm~76cmを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、径72cm~100cm、深さ31cm~38cmを測る。深さはほぼ一定であるが、底部がやや狭くなるものがあった。覆土はローム粒子を含む褐色土を主体とし、自然な堆積状況を呈した。008号竪穴状遺構と接する柱穴は、壁材としてロームが張られており、この点からも本遺構の方が時代を遡ることが明らかである。

遺物はいずれも008号竪穴状遺構に接する柱穴より検出された。図示できたのは土師器4点である。1・2はクロコ土師器杯である。いずれも体部は横方向のナデによって調整される。1は口径14.9cmの大型の



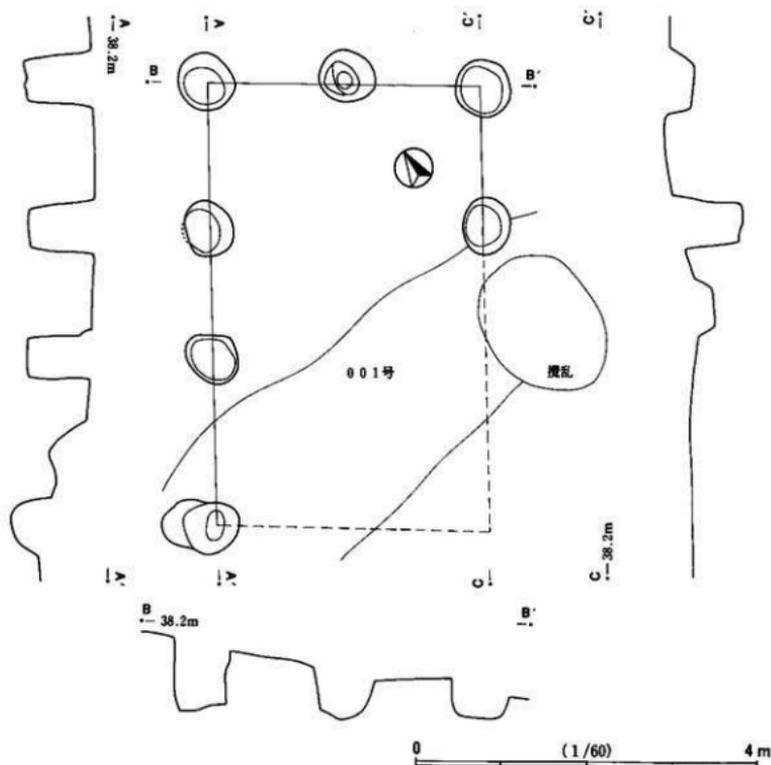
第20図 005号掘立柱建物跡及び出土遺物

ものである。底部及び、体部下半部はヘラ削りによって調整される。2は口縁部片である。3・4は土師器壺の底部片である。いずれもヘラ削りによって調整される。3は内面がナデによって調整されるが、一部に板状工具痕が認められる。

#### 021号掘立柱建物跡 (第21図、図版6)

調査区の東端部、3 D98・99・4 D07・08・09・17区に位置し、比高差0.7mの傾斜地に立地する。側柱式の北側梁行2間(3.3m)×西側桁行3間(5.3m)の建物で、面積は約16m<sup>2</sup>である。桁行主軸方位はN-30°-Eである。南側の3柱穴は001号道路遺構の覆土中であるためか確認できなかった。北側梁行の柱間寸法は96cm~98cm、西側桁行寸法は96cm~140cmを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、径58cm~68cm、深さ22cm~80cmを測る。柱穴の深さは、地表面が高い方が深い傾向にあり、東側の柱穴を除くと底部の標高はほぼ一定となっている。覆土は下層がローム粒子を多く含む暗褐色土、上層がしまりのよい暗褐色土で、自然な堆積状況であった。

遺物は出土しなかった。

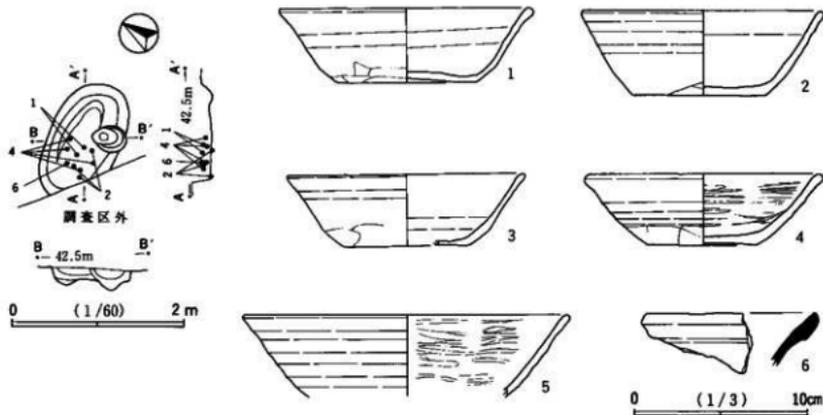


第21図 021号掘立柱建物跡

007号土坑 (第22図、図版6・10)

調査区の西端部、2C31・32区に位置し、ほぼ平坦面に所在する。南西端は調査区外にかかる。南部は一部分攪乱を受ける。平面形状は楕円形を呈している。長径1.4m、短径0.9m、深さ22cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、一部溝状を呈する。覆土はローム粒子を多く含む褐色土を主体とする。土層断面の観察では焼土粒子及び微細な炭化物が少量検出され、炉の可能性も考えられたが、平面的な広がりは見られなかった。

遺物は図示できたものが6点である。1～5はロクロ土師器杯である。いずれも体部は横方向のナデ、底部はヘラ削りによって調整される。1は口縁部がわずかに肥厚する。底部には回転糸切り痕が残る。3は内面の剝離が著しい。4・5は内面がミガキにより調整される。6は須恵器甕の口縁部である。横方向のナデによって調整される。



第22図 007号土坑及び出土遺物

## V 中世以降

### 1 概要

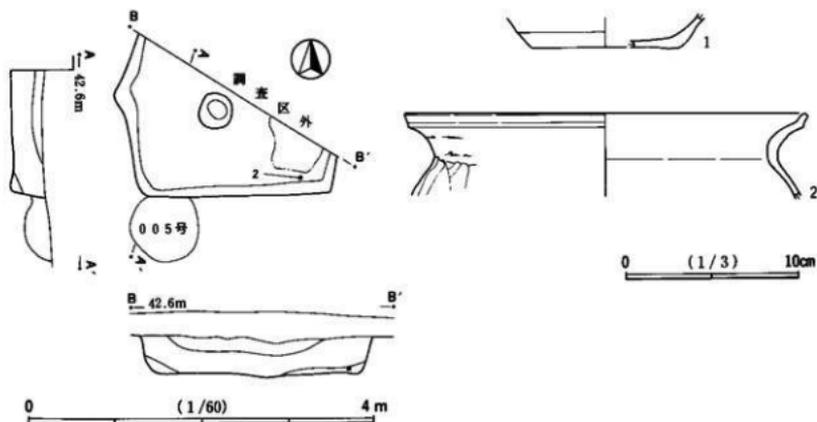
本遺跡の中世以降の遺構は竪穴状遺構1基、道路状遺構1条などである。これらの遺構は伴出する土器がほとんど無く、明確な時期を断定できないが、遺構の形態や、覆土から中世にその所産を求められるものである。なお、時期不明の土坑4基をこの章で扱うこととする。

### 2 遺構と出土遺物

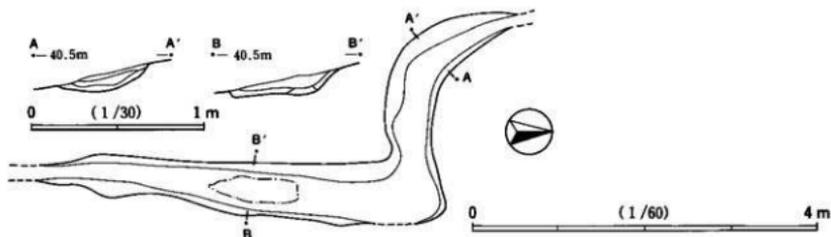
#### 008号竪穴状遺構（第23図、図版7）

調査区の北西部、2C12・13・14に位置し、ほぼ平坦面に所在する。北東部分が調査区外にかかる。005号掘立柱建物跡の柱穴と接するが、土層断面の観察により、005号の柱穴に本遺構の壁が形成されていた状況が見られ、本遺構がより新しいことが明らかとなった。規模は長軸長2.3mを測り、短軸長は1.8mまで確認された。主軸方位はほぼ北方向と判断される。覆土はローム粒子を含む褐色土を主体とする。床面はほぼ平坦であるが、一点鎖線で囲まれた範囲は周囲よりやや高まっており、若干の硬化が認められた。壁高は約40cmを測り、約80°で立ち上がる。床面のほぼ中央に深さ18cmを測る円形のピットが検出された。配置から主柱穴とは考えられない。005号掘立柱建物跡の柱穴の底部である可能性も考えられる。東側の壁面にカマドを思わせる凹みが存在したが、袖部に該当するようなものは検出されていない。遺構の形態から中世の遺構と考えられる。

遺物は図示できたものが2点である。1はロクロ土師器杯の底部片である。内面がナデ、外面が回転ヘラ削りによって調整される。2は土師器甕の口縁部片である。内面はナデによって調整される。口縁部はヨコ方向のナデによって、体部はヘラ削りによって調整される。



第23図 008号竪穴住居跡及び出土遺物



第24図 004号道路遺構

#### 004号道路遺構（第24図、図版7）

調査区の中央部、3 D区付近に位置し、台地縁辺部の標高40m付近に所在する。舌状に張り出した部分にのみ一部残存している。台地の形状に沿って大きく曲折しながら南北に延びる。確認できたのは幅約0.7m 全長約8mを測る部分である。覆土は大きく3層に分かれ、下層はローム粒子を含む粘性のある褐色土、中層は宝永の火山灰が約5cm堆積する。上層はローム粒子を少量含む暗褐色土であり、斜面に沿って流れ込んでいる状況を呈する。中央部の一点鎖線で囲まれた範囲は、長さ約1mにかけて硬化した部分が確認された。壁高は山側に最大55cmを測り、谷側は最大8cmを測る。一部では立ち上がりが存在せず、谷へ落ち込んでいる。検出されなかった両端部については、傾斜が強くなるため、雨水等による浸食を受けたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

#### 012号土坑（第25図、図版7）

調査区の北部、2 C 68・69・78・79区に位置し、台地縁辺部の斜面に所在する。北東側が調査区外に接し、谷へと落ち込む。規模は南北に約4.5mを測り、東西に約3.3mを測る。形態は不整形である。覆土はソフトローム粒子を含む暗褐色土を主体とし、自然堆積状況を呈する。深さは約60cmを測る。西端部は一部オーバーハングする。性格は不明である。

遺物は覆土の浅い部分に縄文土器、土師器の小片が混在しているのみであった。

#### 023号土坑（第25図、図版7）

調査区の中央部、3 C 66区に位置し、緩やかな斜面に所在する。001号道路遺構の更に下部から検出された。022号土坑より約4m北に位置する。平面形状は不整形を呈する。規模は長軸長で約1.7m、短軸長約1.3m、深さ約0.8mを測る。長軸方位はN-33°-Wである。底部は緩やかな攪り鉢状を呈する。土層の観察によると、001号道路遺構のために突き固められたロームが最上層に張られており、001号道路遺構よりも時代が遡ることが明らかである。覆土は最上層を除くとロームブロックを含む暗褐色土を主体とし、人為的な埋め戻し状況を呈する。性格は不明である。

遺物は出土しなかった。

#### 011号炉跡（第25図、図版7）

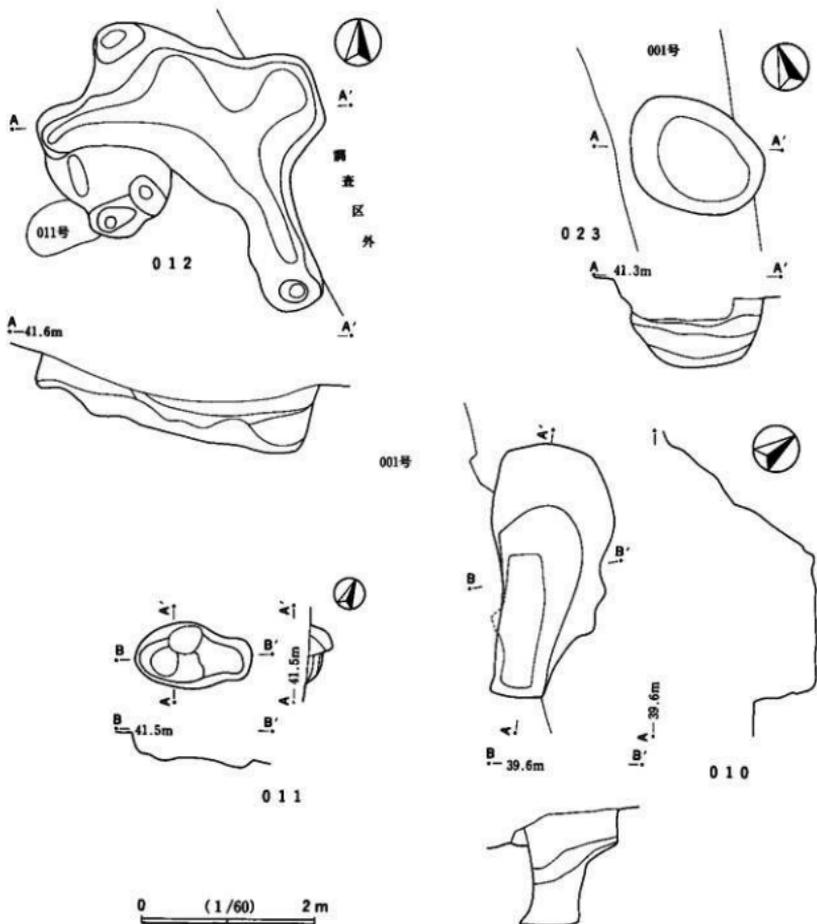
調査区の北部、2 C 77・78区に位置し、台地縁辺部の斜面に所在する。012号土坑に隣接し、北西部は一部分攪乱を受けている。規模は、長軸長138cm、短軸長80cm、深さは約18cmを測る。主軸方位は、N-70°-

Eである。覆土は大きく3層に分かれ、下層は焼土を多量に含む赤褐色土、中層は焼土粒子を含む暗赤褐色土、上層はローム粒子を含む暗褐色土である。焼土は約3cm堆積している。炉として使用された状況を呈しているが、周囲には住居跡に伴う柱穴などは見られず、屋外炉と思われる。

遺物は焼土に土師器の小片が出土したが、図示するに至らず、時代も特定できない。

010号土坑 (第25図、図版7)

調査区の中央部、4D02・12区に位置し、東向きに所在する。001号道路遺構と重複する。平面形状はほぼ長方形を呈する。規模は長軸長約3m、短軸長約0.9mを測る。底部では長軸長約1.6m、短軸長約



第25図 012号土坑・023号土坑・011号炉跡・010号土坑

0.5mを測る。長軸方位はN-42°-Wである。底部はほぼ平坦である。覆土は大きく2層に分かれ、下層はローム粒子を多く含み、よくしまった黄褐色土、上層はローム粒子を少量含む暗褐色土を主体とする。壁高は北西側が最大で184cmを測り、約55°で立ち上がる。南東側では壁高約75cmを測り、約80°で立ち上がる。001号道路遺構と重複するが、土層断面によると001号よりも本遺構の方がより新しい状況が確認された。性格は不明である。

遺物は出土しなかった。

## VI まとめ

### 1 縄文・弥生時代

名城遺跡では、縄文時代から弥生時代にかけての遺構は縄文時代の土坑1基のみであった。出土遺物については小片であるが、荒海式に比定されるものが中心であった。名城遺跡から出土したこれらの条痕文系土器群は、縄文や細密条痕の地文の上から工字文を施文しており、渡辺修一氏によると、縄文時代晩期における荒海式の中でも最も新しい時代のもと考えられる。さらに、わずか3片ではあるが東海系の水神平Ⅱ式土器の検出が目される。109・110に見られる波状文風の施文については、静岡県湖西市中村遺跡<sup>9)</sup>や同県三ヶ日町青木遺跡<sup>9)</sup>、東京都新島本村田原遺跡<sup>9)</sup>に類似したものが見られる。また、愛知県清水遺跡<sup>9)</sup>から報告されているものについては、波状文風の文様に酷似しているものが見られる。一方、県内では東金市道庭遺跡<sup>9)</sup>において、水神平Ⅱ式土器が、荒海式土器の新段階に共伴していると報告されている。また、成田市荒海貝塚<sup>9)</sup>からは、丸子式の特徴をそのまま認めるとして西部東海系条痕文土器の検出が報告されている。この荒海貝塚出土の西部東海系土器は口唇部の形状及び、口唇部上面に観察される2条の押引文など、本遺跡出土の108と酷似している。

西村正衛氏によると、「荒海においては、一方に東海地方初期弥生式の貝殻条痕文の土器によって象徴される新文化の波及に曝されたとともに、他方に縄文文化発展の余地を示し、変形工字文主体の土器製作に移行し、これを基調とする文様のヴァリエティが中に胎動した形相もとらえられた。」<sup>7)</sup>と報告されているが、更に近年、渡辺修一氏の報告によると、良好な基準資料（単一段階を示す）の不足という制約は否めないとしながらも、「荒海式時の後半（縄文時代晩期最終末とされてきた段階）とは、弥生時代前期末から弥生時代中期初頭にかけてに比定される可能性が高く、またその成立には東北地方からの強い影響が働いている。また、その段階の東北地方にはすでに弥生文化が波及していたことは今日疑いなく、少なくとも該期は縄文時代とは呼称しない、したがって荒海式土器は縄文土器とは呼称しないほうがよいと考えられる。」<sup>8)</sup>とされている。これらの状況を考えるとき、本遺跡においても荒海式の土器と水神平Ⅱ式土器が共伴する可能性が考えられる。千葉県における縄文晩期と弥生時代との位置付けにおいて、本遺跡から検出された土器が今後の参考資料となることを望む。

### 2 古墳時代

古墳時代の遺構としては、014号住居跡と001号道路遺構が検出されている。014号住居跡はカマドを持つ古墳時代後期の住居跡である。隣接する蕪木5号墳<sup>9)</sup>から出土した鉄鏃は、折原洋一氏によると鉄鏃組成の変遷から、6世紀末から7世紀中葉に相当すると報告されている。014号住居跡は出土遺物が少ないがほぼ同時期の所産と考えられ、蕪木5号墳との関連が目される。また、001号道路遺構についても、検出された土製小玉、赤色塗彩された小形埴・小壺・高杯など儀礼的な遺物は6世紀後半の年代観が与えられ、出土状況から蕪木5号墳との関連が窺える。これらの遺物と蕪木5号墳との位置関係を考え合わせると、蕪木5号墳の墓道である可能性が高いと考えられる。今回の調査により、001号道路遺構からの出土遺物は蕪木5号墳の周辺環境をより一層明らかにすることができると思われる。

### 3 平安時代

平安時代の遺構は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、土坑1基が検出され、今回の調査の主体を成す。調査範囲が狭いため、竪穴住居跡はその全容を確認できなかったが、遺物では多くの資料を得ることができた。また、013号竪穴住居跡や蕪木5号墳の所在する台地上の畑にはおびただしい量の土師器が散布していることを考えると、平安時代の大きな集落が存在する可能性が高い。

出土遺物の検出されなかった020号竪穴住居跡を除くと、いずれの竪穴住居跡も9世紀のものと考えられる。この3軒の竪穴住居跡からは、煤の付着した杯が出土しており、灯明皿としての使用が窺える。また、009号竪穴住居跡、015号竪穴住居跡に類似点が多く、013号との相違点が目立つ。まず、013号竪穴住居跡の出土遺物量の多さである。さらに、土師器杯について見ると、クロ土師器杯が圧倒的な割合を占めているという点において、他の2軒との相違が挙げられる。これを時期差と見るべきか、ここでの言明は避けたいが、013号の大きな特徴と考えられる。また、009号竪穴住居跡、015号竪穴住居跡については、斜面に立地するという点において、集落における特別な性格を持つ住居跡である可能性が考えられる。

013号竪穴住居跡における灯明皿の検出は興味深いものがある。灯明皿については、芝山町小原子遺跡群<sup>10)</sup>の報告に詳しいが、その中で「供膳具の転用ではなく、専用の器として造作されたと思われる型式が検出された。」とある。この観点から見ると、本遺跡では専用の器として造作されたという形跡は認められない。しかしながら、煤が付着した杯の大部分はひどく歪んでいる。このことから、あまり実用に適さない杯が選別され、灯明皿として利用された可能性が高いと思われる。その出土状況は、径の最も大きい杯13-2の上に3個体の杯を重ね、5個目の杯13-9を垂直に立てている。煤の付着状況を見ると、13-2は内面のみ、3個体は内外の両面、13-9については内面と、垂直に立てた時に下となる(油の表面に接すると考えられる)部分の内外面に一層濃く煤が付着している。以上のことから、どの杯の間にも炎が灯されていたことが想定される。つまり、4か所から炎が上がっていたことになる。しかも、最上段は懐中電灯の反射鏡のような状態となっていたのである。他の住居跡からは煤が付着した杯が1個体ずつしか出土していないことを考えると、013号竪穴住居跡の灯明皿からは儀式めいたものを感じずにはいられない。墨書土器や線刻土器も出土しているこの013号竪穴住居跡の性格を示しているのではないだろうか。

- 注 1 愛知県考古学談話会 1985 「中村遺跡」『<条痕土器>文化をめぐる諸問題 資料編1』
- 2 愛知県考古学談話会 1985 「青木遺跡」『<条痕土器>文化をめぐる諸問題 資料編1』
- 3 愛知県考古学談話会 1985 「田原遺跡」『<条痕土器>文化をめぐる諸問題 資料編1』
- 4 紅村弘 1978 「愛知県清水遺跡」『東海先史の諸段階 (資料編II)』
- 5 (財)千葉県文化財センター 1988 「弥生時代」『房総考古学ライブラリー』4
- 6 愛知県考古学談話会 1988 「荒海貝塚」『<条痕土器>文化をめぐる諸問題』
- 7 西村正衛 1984 「千葉県荒海貝塚 (第1・2次調査)」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部
- 8 渡辺修一 1993 「荒海式土器と須和田式土器の間」『史館』第24号
- 9 折原洋一 1995 「九十九里地域における変則的古墳出現以後の鉄器の変遷から見た蕪木5号古墳の鉄器について」『蕪木5号古墳』山武考古学研究所
- 10 松田政基 1990 「4 庄作、谷窪・上乗遺跡検出の灯明用の坏について」『小原子遺跡群』小原子遺跡群調査会、芝山町教育委員会

第2表 土器観察表

遺器番号	番号	種類	器種	法口径	高さ	口径	底径	重量	底形状	胎土	焼成	色	裏	備考	
014	1	土師器	高杯	14.8					底部1/5	白色砂粒	良好	赤褐色		内外面赤彩・磨耗激しい	
	2	〃	壺	14~17					口縁片	白色砂粒	普通	赤褐色		磨耗激しい	
	3	〃	壺	24.1					口縁1/3	白色砂粒・石炭粒子	良好	褐色			
001	1	土師器	小形埴	7.3	3.9	8.0			ほぼ完全形	白色砂粒	良好	赤色・淡黄褐色		内面・内面赤彩	
	2	〃	小壺	8.5					底部1/5	白色砂粒・石炭粒子	良好	赤色		内外面赤彩	
	3	〃	小形壺		6.0				底部完全形	白色砂粒	良好	赤褐色			
	4	〃	高杯	14.6					口縁1/7	白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	赤褐色		内裏・外面赤彩	
	5	〃	高杯						破片	白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	赤色		内裏・外面赤彩	
	6	〃	杯	14.0					口縁1/8	白色砂粒	良好	赤色・赤褐色		内外面赤彩	
	7	〃	杯	14.0	6.3				口縁1/3	白色砂粒	良好	赤色・褐色		内外面赤彩	
	8	〃	杯						口縁片	白色砂粒	普通	赤褐色		内裏・磨耗激しい	
	9	〃	壺		8.2				底部1/5	白色砂粒	良好	黄褐色		底部木葉痕	
	10	〃	壺	18.5					口縁1/5	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	淡黄褐色			
	11	〃	壺						口縁片	白色砂粒・石炭粒子・赤色スコリア粒	良好	褐色			
	12	〃	壺		6.3				底部1/4	白色小石・白色砂粒	良好	赤褐色			
	13	〃	壺		5.8				底部9/10	白色砂粒・石炭粒子	良好	赤褐色			
	14	須恵器	壺						破片	白色砂粒	良好	暗褐色		粘土組織合痕	
	15	土師器	鉢	23.3					口縁1/4	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	良好			
	16	〃	甌		11.0				底部1/5	白色砂粒・石炭粒子	良好	暗赤褐色			
009	1	土師器	杯	11.9	9.5	3.5	2/3		赤色スコリア粒・白色砂粒	良好	暗褐色			白色針状物質を含む	
	2	〃	杯	12.2	7.7	4.0	底部4/5		白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	淡黄褐色				
	3	〃	杯	11.3	6.3	4.0	ほぼ完全形		白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色へ暗褐色			内面腐付着	
	4	〃	杯	14.7	7.4	5.9	ほぼ完全形		白色砂粒・黒色粒子	普通	暗褐色				
	5	〃	壺	20.3					口縁完全形	白色砂粒・赤色スコリア粒	普通	赤褐色			
	6	〃	壺	19.4					口縁1/3	白色砂粒・石炭粒子	良好	褐色			
	7	〃	壺	20.4					口縁1/5	白色砂粒・石炭粒子	良好	淡黄褐色			
015	1	土師器	杯	12.0	6.0	3.9			完全形	白色砂粒・黒色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色			
	2	〃	杯	13.4					口縁1/5	白色砂粒	良好	暗赤褐色		内外面腐付着	
	3	〃	杯	11.9	5.3	4.1			口縁1/3	白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	暗褐色			
	4	〃	杯	12.0	5.1	4.3	底部1/2		白色砂粒・石炭粒子	良好	赤褐色				
	5	〃	杯	12.4	6.8	4.3			口縁1/4	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	淡黄褐色		クロコ土師器	
	6	須恵器	高台付杯	高台18.0	0				高台1/2	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色		未切り底・回転へつ削り	
	7	土師器	高台付杯	20.5					口縁1/3	白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	赤褐色		粘土組織合痕	
	8	〃	壺	19.0					口縁1/4	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	褐色		底部木葉痕	
	9	〃	壺	22.2					口縁1/6	白色砂粒	良好	暗褐色			
	10	〃	壺						口縁片	白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	褐色			
	11	〃	壺						口縁片	白色砂粒・灰黒色小石	普通	赤褐色			
	12	〃	壺		7.0				底部1/3	白色砂粒	良好	赤褐色			
013	1	土師器	杯	17.8	6.7	6.1	ほぼ完全形		白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色			クロコ土師器・クロコ目	
	2	〃	杯	15.8	6.4	5.4	完全形		白色砂粒	良好	褐色・赤褐色			・内外面腐付着	
	3	〃	杯	13.1	6.4	4.3	完全形		白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	普通	黄褐色			・新痕あり	
	4	〃	杯	12.5	5.9	4.3	ほぼ完全形		小石・白色砂粒	良好	暗褐色			・内外面腐付着	
	5	〃	杯	13.2	7.1	3.7	ほぼ完全形		白色砂粒・石炭粒子・雲母粒	良好	褐色			縁刻・底部へつ書き・内面腐付着	
	6	〃	杯	13.9	7.1	4.3	ほぼ完全形		白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	赤褐色			クロコ土師器・内外面腐付着	
	7	〃	杯	12.7	5.9	3.9	ほぼ完全形		白色砂粒・石炭粒子	良好	赤褐色・褐色			・内外面腐付着	
	8	〃	杯	11.9	7.0	4.3	完全形		白色砂粒	良好	暗褐色			・内外面腐付着	
	9	〃	杯	12.0	6.1	3.8	完全形		白色砂粒・石炭粒子	良好	暗褐色			・墨書「十一」・内外面腐付着	
	10	〃	杯	13.2	5.7	4.2	ほぼ完全形		白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	黄褐色			・墨書「松原」・回転未切底	
	11	〃	杯	12.3	6.7	4.4	ほぼ完全形		白色砂粒・石炭粒子	良好	黄褐色			・内外面腐付着・回転未切底	
	12	〃	杯		5.9				底部4/5	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色へ黄褐色			・回転へつ削り
	13	須恵器	高台付杯	20.5	6.7				底部6/7	白色砂粒・黒色粒・赤色スコリア粒	良好	淡黄褐色			
	14	土師器	甌	26.7	10.4	22.8	ほぼ完全形		白色砂粒	良好	暗赤褐色			把手の跡・内外面腐付着	
	15	〃	壺	19.6					口縁完全形	白色砂粒	良好	褐色			
	16	〃	壺	18.1					口縁9/10	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	赤褐色			
	17	〃	壺		11.6				底部完全形	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	赤褐色			
	18	〃	壺		8.0				底部1/3	小石・白色砂粒	良好	暗褐色			
	19	〃	鉢	23.8					口縁1/5	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗黄褐色			
005	1	土師器	杯	14.9	6.0	4.5			口縁2/5	小石・白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色		クロコ土師器	
	2	〃	杯	13.6					口縁1/4	白色砂粒・石炭粒子	良好	暗褐色		・内外面腐付着	
	3	〃	壺		8.8				底部2/5	白色砂粒	良好	暗赤褐色		内面嵌状工具痕	
	4	〃	壺		12.0				底部1/5	白色砂粒・石炭粒子	良好	灰褐色			
007	1	土師器	杯	14.8	8.0	4.3	底部3/5		白色砂粒・石炭粒子・赤色スコリア粒	良好	淡褐色			クロコ土師器・未切り底	
	2	〃	杯	14.0	7.6	4.9	口縁1/3		白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗褐色			クロコ土師器	
	3	〃	杯	13.8	7.7	4.1	口縁1/5		白・黒色小石・白色砂粒・石炭粒	良好	暗褐色			・ろくろ目・内面磨削激しい	
	4	〃	杯	13.8	6.3	4.1	底部3/5		白色小石・白色砂粒・石炭粒子	良好	暗褐色			クロコ土師器	
	5	〃	杯	18.9					口縁1/7	白色砂粒・赤色スコリア粒・石炭粒子	良好	赤褐色		クロコ土師器	
	6	須恵器	壺						口縁片	白色砂粒・石炭粒子・黒色粒	良好	暗褐色			
008	1	土師器	壺		8.5				底部1/5	白色砂粒・石炭粒子	良好	暗黄褐色		クロコ土師器・回転へつ削り	
	2	〃	壺	23.3					口縁1/9	白色砂粒・赤色スコリア粒	良好	暗赤褐色			

# 写 真 图 版





道跡遠景  
北から



調査前近景  
北西から



調査風景：左  
南から



022号土坑：右  
北から



014号竪穴住居跡  
北西から



014号カマド：左  
南東から



001号遺物出土状況：右  
北から



001号道路遺構  
東から



009号竪穴住居跡  
カマド付近遺物  
出土状況  
北東から



015号竪穴住居跡  
北東から



015号カマド；左  
南西から



015号遺物出土状況；右  
南西から



013号整穴住居跡  
北東から



013号遺物出土状況  
全景：上  
北西から



013号カマド付近：左下  
東から



013号カマド：右下  
南東から



005号掘立柱建物跡  
南から



005号土層断面：左  
南西から



007号土坑：右  
北東から



021号掘立柱建物跡  
南西から

008号竪穴状遺構  
南から



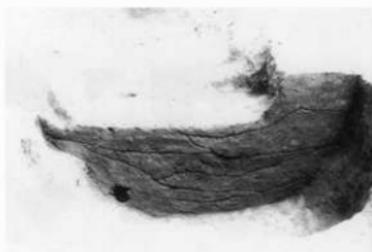
004号道路遺構  
北西から



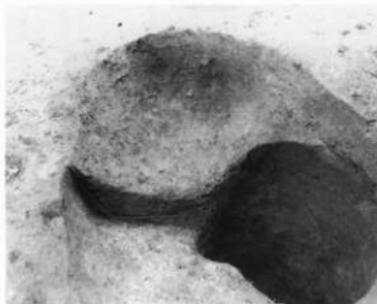
012号土坑；左上  
南から



023号土坑；右上  
南西から

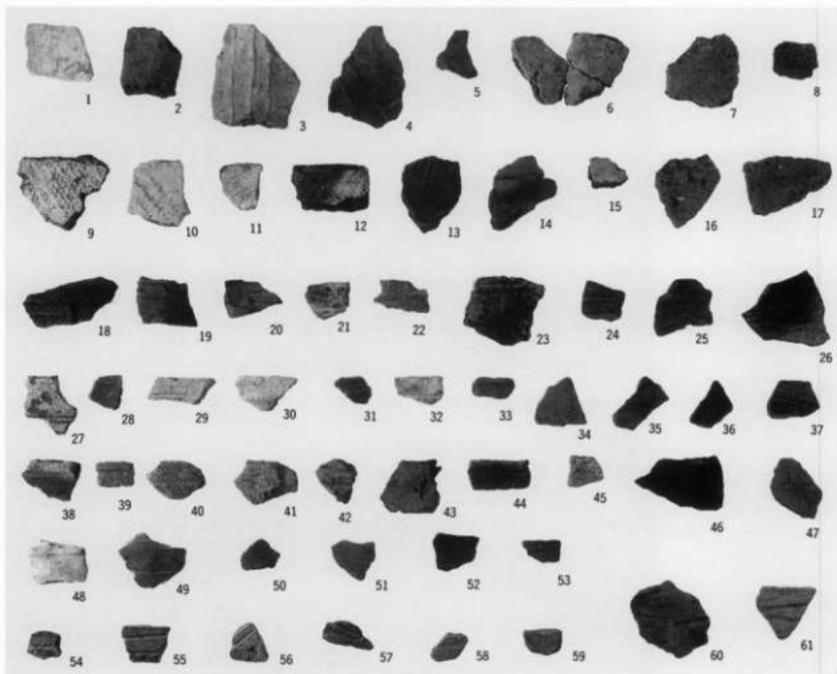


011号炉跡；左下  
北東から

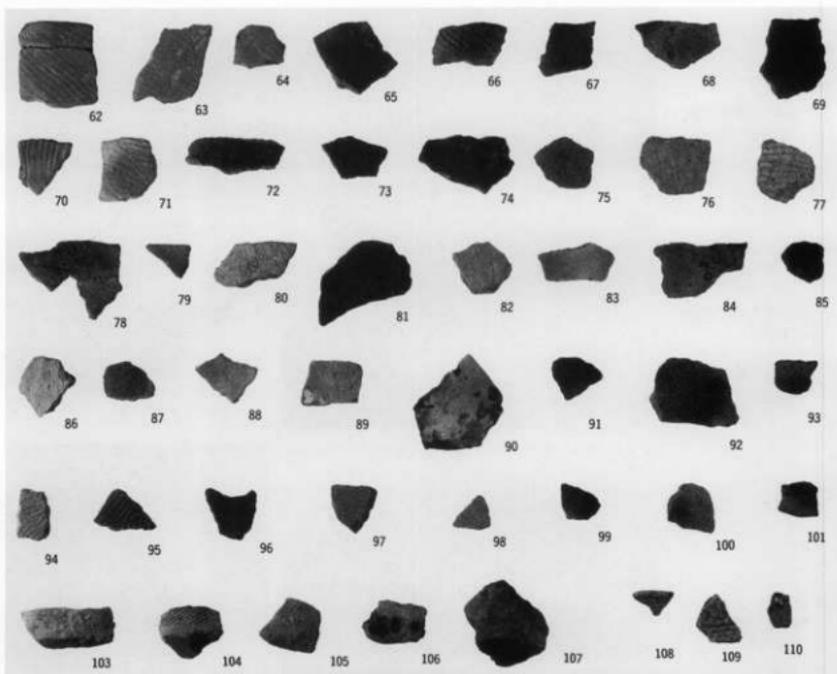


010号土坑；右下  
北西から

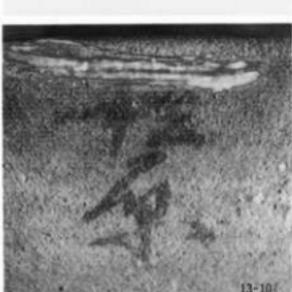
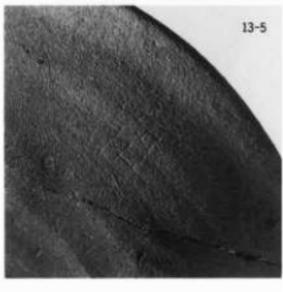
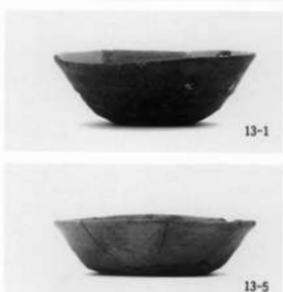
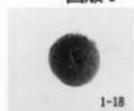
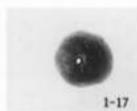




縄文時代土器 (1)



縄文時代土器 (2)・水神平Ⅱ式土器





13-16



13-14



13-15



5-2



13-2内



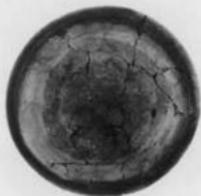
13-4内



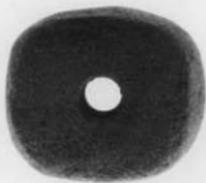
7-1



13-2外



13-4外



13-22



13-5内



13-6内



13-7内



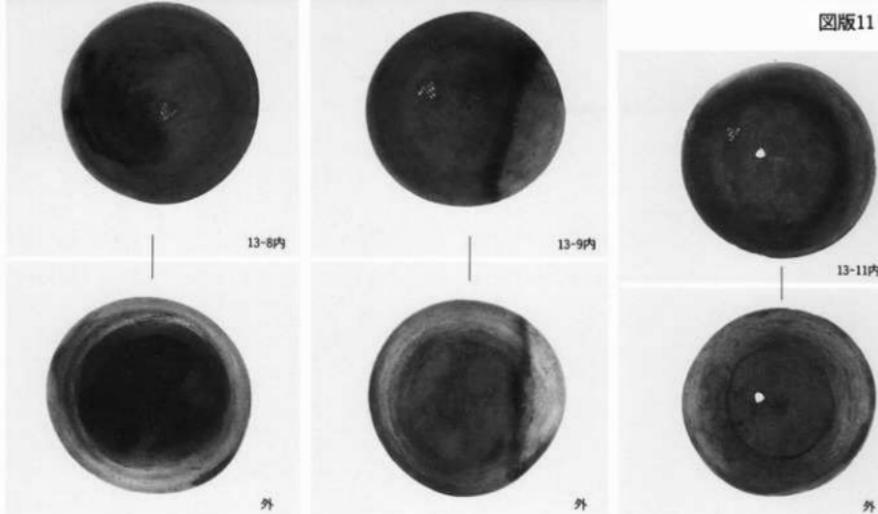
13-5外



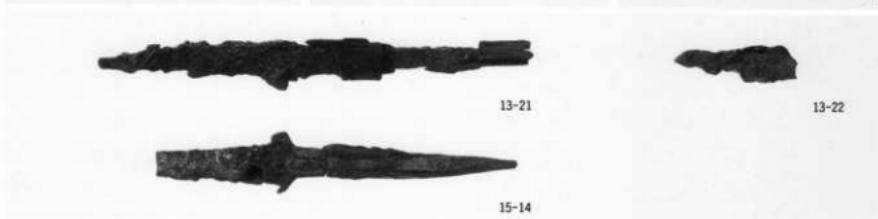
13-6外



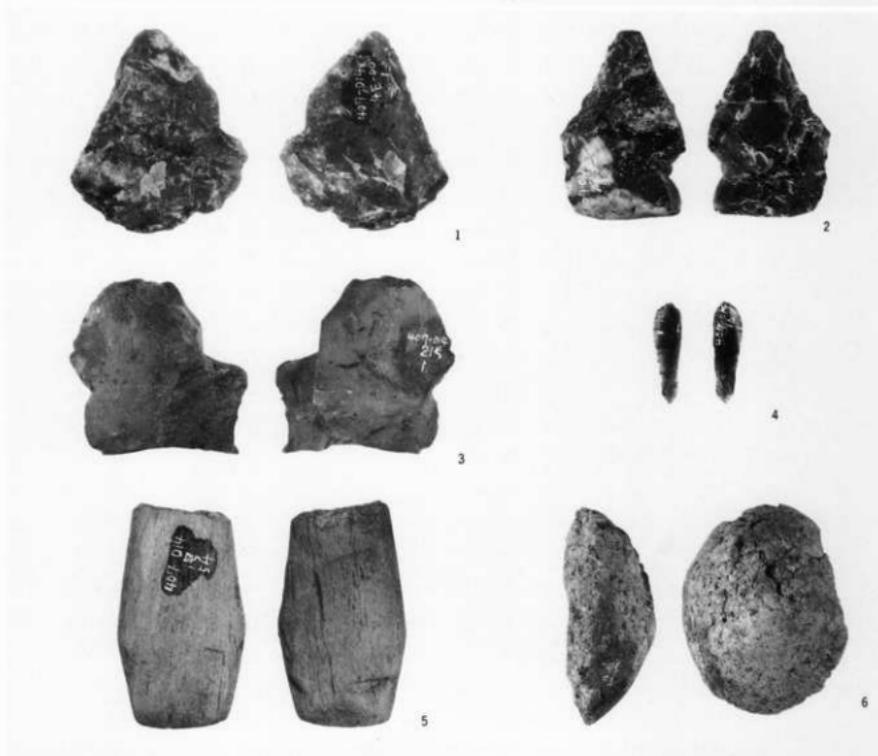
13-7外



遺構出土遺物  
(3)



鉄製品



出土石器  
(3)

報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどう なりたまつおせん							
書名	主要地方道成田松尾線Ⅷ							
副書名	松尾町 名城遺跡							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第333集							
編著者名	石塚 浩							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 8 0 9 - 2					Tel 043-422-8811		
発行年月日	西暦 1998年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村:遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
名城	山武郡松尾町八 田字名城3,385 ほか	12407	014	35度 38分 27秒	140度 27分 13秒	19961202～ 19961213  19970501～ 19970613	210  770	主要地方道 成田松尾線 県単道路改良（幹線道 路網整備） 事業（松尾 地区）に伴 う埋蔵文化 財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
名城	集落跡	縄文時代			縄文土器（晩期）		変形工字文土器の検出	
		弥生時代			弥生土器（水神平Ⅱ式）		東海系土器の検出	
		古墳時代	道路遺構 竪穴住居跡	1条 1軒	土製小玉、小形塔、 石製紡錘車		蕪木5号墳への墓道 と思われる道路遺構 の検出	
		平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	4軒 2棟	土師器、須恵器、灯 明皿、線刻・中黒・ 墨書土器			
		中世	道路遺構 竪穴状遺構	1条 1基				

千葉県文化財センター調査報告第333集

## 主要地方道成田松尾線Ⅷ

松尾町名城遺跡

---

平成10年 3月31日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千	葉
		県	土
		木	部
			千葉県中央区市場町1-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡809-2
印	刷	株式会社	弘
			文
			社
			市川市市川南2丁目7番2号

---